

A. モンタヌスの『日本誌』に描かれた Cangoxuma (鹿児島)

ー その資料的価値に関する一考察 ー

中 島 大 輔

序

ヨーロッパの都市史研究において、公文書や年代記など種々の記録文書と並んで大きな資料的価値を持つのが同時代の図版、とりわけ都市の地図や見取り図、景観図である。代表的なものの一つが16世紀末から17世紀にかけてブラウン Georg Braun とホーヘンベルフ Frans Hogenberg によって編集発行された「世界の都市」Civitates Orbis Terrarum (1572～1618年)である。全6巻から成るこの都市景観図集成は、ヨーロッパだけでなくアジア、アフリカ、アメリカの都市も含み、都市研究において第一級の資料となっている。

17世紀の半ばに銅版画家マテウス・メーリアン Matthaeus Merian (1593～1650年)が制作・発行した『ドイツ地誌』Topographia Germaniae (1642～1675年)は、死後に息子マテウス(子)とカスパーによって発行されたものを含めれば全30巻、景観図の数は2,000を超え、著述家マルティーン・ツァイラー Martin Zeiler (1589～1661年)による地誌的紹介と相まって三十年戦争当時のドイツならびにヨーロッパの都市の状況を生き生きと伝えている。とりわけマテウス(父)が描いたものはきわめて写実的で、故郷バーゼルをはじめとするスイスの都市やフランクフルトなどの南ドイツの都市については資料的価値が高い。ちなみにハイデルベルクについては、逆に景観図からメーリアンが描いた地点が特定されているという。

メーリアンの工房は息子だけでなく、ヴェンツェル・ホラー Wenzel Hollar のような優れた銅版画家も抱えており、またすでに発行されている都市景観図を下敷きに制作することもあった。メーリアンはこの分野の代表的な銅版画家であるが、そのほかにも都市景観図を描いた画家は枚挙にいとまがなく、17世紀は都市景観図の最盛期と言える。

さてこのような時代、東インド会社を設立して東南アジアを中心に活発な交易を行ったオランダ人も現地の情報を本国に送った。その中には日本の地図や景観図も含まれている。

日本に関するこのような情報が、ある意味集大成されたのがアルノルドゥス・モンタヌスによる『オランダ東インド会社遣日使節紀行』¹ いわゆる『日本誌』(1669年)である。(以下『日本誌』

¹ 正規のオランダ語の題名は次のとおり。Gedenkwaerdige gesantschappen der Oost-Indische maetschappy in 't Vereenigde Nederland, aen de kaisaren van Japan: vervaetende wonderlijke voorvallen op de togt der Nederlandsche gesanten: beschryving van de dorpen, sterkten, steden, landschappen, tempels, gods-diensten, dragten, gebouwen, dieren, gewasschen, bergen, fonteynen, vereeuwde en nieuwe oorlogs-daeden der Japanders: verciert met een groot getal afbeeldsels in Japan geteikent: getrokken uit de geschriften en reis-aenteikeningen

と表記。) 2部から構成される本書には、本文中に刷り込まれた挿図71点ならびに折り畳みの形で挟まれた大判の折込25点が含まれている。この折込の一つが Cangoxuma すなわち鹿児島島の図である。

それではメーリアンの都市景観図とほぼ同時期に発表されたこの図版、ならびに『日本誌』本文の鹿児島島の記述にはどれほどの資料的価値があるのだろうか？ またそもそもこの図版においては何がどこにどのように描かれているのだろうか？

この銅版画の存在については以前から知られていたが、これまでその歴史的・資料的価値については必ずしも詳細な研究が行われていない。また鹿児島に関する記述についても、1925年に発行された和田萬吉訳の『モンタヌス日本誌』(丙午出版社)以来、新たな翻訳が出ていない。和田訳は画期的な紹介であり、類のない労作と言えるが、次の2点で拠り所とするにはほど遠い。第一は原典のオランダ語ではなく英語版からの重訳であること。第二はところどころ省略があり、厳密に言えば完訳ではなく抄訳になっている点である。

今回、筆者はこの銅版画(彩色版)をドイツより入手したため、凡例をはじめ、微細な部分の判読や判別が可能になった。また諸大学のリポジトリによるオンラインの原書ならびに翻訳版の提供により、貴重書である諸版を容易に比較できるようになった。

そこで本論ではまずモンタヌスによるオランダ語の原典を英語版および独語版を参考に読み解き、図版と照応しながら何がどこにどのように描かれているのかを明らかにする。その上で、図版とテキストがどれほど当時の鹿児島を正しく伝えているのかという資料的価値について、考察を試みることにする。

I

まず著者モンタヌスと『日本誌』について簡単に紹介しておこう。アルノルドゥス・モンタヌス Arnoldus Montanus, 本名アルノルト・ファン・デン・ベルフ Arnold van den Berg² は1625年アムステルダム生まれ。ライデン大学で神学を修め、1657年アムステルダム近郊のスホーンホーフェン村で牧師兼ラテン語文法学校の校長を務める。その傍ら、オラニエ・ナッサウ公家の伝記や海戦の英雄の伝記、博学書など数多くの本を著し、1683年にスホーンホーフェンで亡くなった。³

1669年アムステルダムで出版された『日本誌』は、地理学書の出版者ヤーコブ・ファン・メウルスが1665年の『東インド会社遣清使節紀行』(ニューホフ著)に続いて企画したもので、当時のヨーロッパにもたらされた情報を網羅的に集約した、初めての本格的な日本紹介となっている。

der zelve gesanten / door Arnoldus Montanus (連合ネーデルランド東インド会社の、日本皇帝のもとへの記憶すべき使節の数々。オランダ使節の旅行中に起こった不思議な出来事。村・城・都市・風景・寺院・宗教・服装・建物・動物・植物・山・泉・昔および最近の日本人の戦争についての記述。日本で描かれた多数の絵による装飾。使節の著述や旅行記からのアルノルドゥス・モンタヌスによる抜粋)

² van Bergen との説もあり(下記註3参照)。

³ モンタヌスの生涯と著作についてはヘッセリンク Reiner H. Hesselink 「カルヴァン主義思想家、アルノルドゥス・モンタヌスとその業績」、有坂隆道編『日本洋学史の研究』創元社、1991年、1~23頁。

その内容は多岐にわたるが、中心となるのは長崎オランダ使節の江戸参府の記録で、フリシウス (1649～50年)、ワーヘナール (1657年、59年)、インダイク (1660～61年)、ファン・ゼルデレンの参府記録である。

そのほか、マルコ・ポーロの『東方見聞録』、イエズス会士の書簡集、マッフェイの『インド史』、リンスホーテンの『東方案内記』(1596年)、平戸商館長を務めたカロンの『日本大王国誌』(1648年) などから日本事情が紹介され、ヘンドリック・ハメル『朝鮮幽囚記』の内容も採録されている。なおモンタヌス自身は一度もオランダを離れたことはない。⁴

原典となるオランダ語版 (以下「原典」) は1669年 (二度)、1670年、1680年の四度刷られた。そして初版発行の1669年にはアムステルダムでドイツ語訳が、1670年にはロンドンで英語版、1680年にはフランス語版のそれぞれ初版がアムステルダムで出版された。こうした刊行経緯から窺えるように、『日本誌』は1639年の鎖国以降、ヨーロッパにとって日本についての最も重要な情報源として、その影響は19世紀まで続いた⁵。

II

鹿児島に関する記述および図版 Cangoxuma は、最後となるファン・ゼルデレンの参府紀行 (原典436～456頁) の中で紹介されている (436頁Aから439頁A)。他にも堺や宮、パウロママ山など紹介されている地名はあるが、この紀行文においては鹿児島ほど頁を割いて集中的に紹介されている土地はない。

ファン・ゼルデレンの参府紀行はヘンドリック・ハメルらの朝鮮幽囚の記録⁶ に続く形で「しかしファン・ゼルデレンが長崎 Nangesaque から日本の皇帝を訪ねた旅行は、さらに詳しく見る価値がある」と始まる。まず10月の出島での競売の模様と「長崎の山」ならびに11月の「長崎市民の武装行列」(いずれも小見出し付きの節) を紹介した後、使節の旅行記が始まる。

これからは折込図 Cangoxuma の絵と対照させながら詳細に読んで行くことにしよう。筆者によるオランダ語原典⁷ からの試訳は誤謬なしとしないが、巻末にこの箇所のオランダ語、英語、独語のテキスト全文⁸ を提示し、識者の批正を仰ぐことにする。

また図版 Cangoxuma には左上端にオランダ語で、右上端にはそれぞれの版に応じて英語もしくは

⁴ この箇所はクレインス フレデリック『17世紀のオランダ人が見た日本』臨川書店、2010年の説明に負う。

⁵ 筆者の入手した銅版画「長崎の港と入江」Der Hafen und die Bai von Nagasaki (『諸外国と民族学の愛好家のためのアルバム』所収、ライプツィヒ、デルフリング・ウント・フランケ出版、1844年) には、中央の長崎の景観を囲む形で『日本誌』の挿図が数点改変されて載録されている。

⁶ 内容的にはヘンドリック・ハメル『朝鮮幽囚記』平凡社、1969年とほぼ重なる。

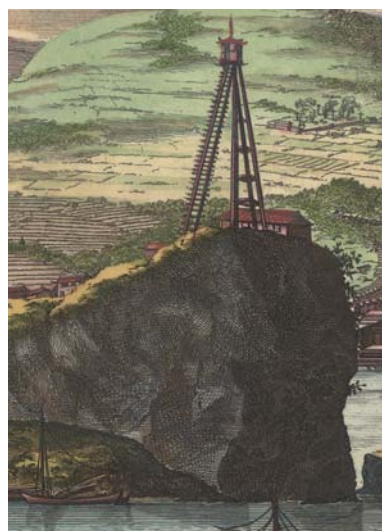
⁷ 翻訳には以下の神奈川大学図書館リポジトリで公開されているオランダ語版 (1669年) を利用した。
(<http://hdl.handle.net/10487/4653>)

⁸ 参照した英語版 (<http://hdl.handle.net/10487/5111>)、ドイツ語版 (<http://hdl.handle.net/10487/4688>) も神奈川大学図書館リポジトリの資料による。

はフランス語の凡例が記されている（ドイツ語版はオランダ語の凡例のみ）。筆者がそれぞれの版で確認したこの3ヶ国語による凡例もこの順で図版に添えることにする。

なお以下太字で示した訳中の下線は図版で言及された対象を示し、図版中の凡例の番号を 標識灯¹ のように表記する。訳中の（ ）は訳者の補足である。また必要に応じて固有名詞等にはオランダ語の原語を添えた。

しかし江戸へ向かうオランダ使節は朝鮮海 **Coreer Ocean** で北東からの激しい嵐に遭い、前帆が吹き飛ばされた。使節はほどなく鹿児島 **Cangoxuma** の港に着き、標識灯¹ の前に碇泊した。この標識灯はかつてポルトガル人が当地で自由貿易を行っていたとき、日本人の許可を得て初めて建てたものである。



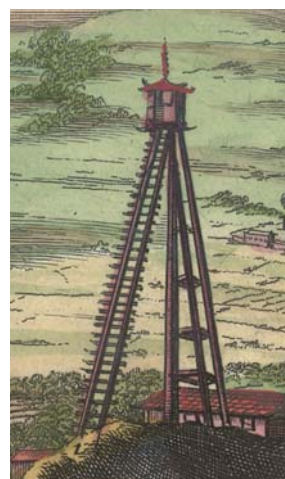
1. 標識灯のある高い山 Hooge berg met een vuur-baeck /a Heigh Mountaine with a beacon /Haute Montagne où il'y a un Fanfal) 凡例の番号1は標識灯の左下

冒頭から、江戸へ向け船で長崎を発った使節ファン・ゼルデレン一行が朝鮮海すなわち東シナ海で嵐に遭い、鹿児島の港に漂着したことが述べられる。これが本来の参府行程に位置しない鹿児島を訪ねた理由とされる。碇泊した場所は標識灯の立つ岩の前。この標識灯は、本文のとおりポルトガル人が日本人の許可を得て建てたとすれば、16世紀後半の設置ということになる。

大都市 鹿児島の描写

鹿児島はポルトガル人が日本で初めて上陸し、最初に拠点を置いた都市である。経緯は次のとおりである。日本のアンジロー **Anger** という若者が厳しい追っ手を恐れ、日本の僧院に駆け込み、そこからマラッカに逃れた。乗り込んだ船はポルトガル人のゲオルギウス・アルヴァレジウス（ジョルジェ・アルヴァレス）**Georgius Alvaresius** が船長を務める商船で、1547年のことである。イエズス会士フランシスクス・クサヴェリウス（フランシスコ・ザビエル）**Franciscus Xaverius** はそこで彼（アンジロー）と知己を得、ほどなく彼とともに鹿児島に渡り、アンジローの友人に親切にもてなされた。ザビエルはローマ・キリスト教を広める機会を得たのである。

その後、ポルトガル人はこの鹿児島の町を彼らの通商の拠点とした。というのはこの町は薩摩王国の中できわめて地の利が良かったからである。上述の標識灯は上部が方形になっており、その上にはねじれた球が付いていて、太い杉の柱に乗っている。柱は二本の大



標識灯

きな木材で支えられ、木材は上部で大きな鉄の鉤によって柱に固定されている。段が脇に突き出た高い梯子がかかっている、上に通じている。

小見出し「大都市 鹿児島の描写」に続けて、前半はポルトガル人の初めての日本来航（1543年）、またアンジロー⁹のマラッカ行き（1547年）、ザビエルの鹿児島到着（1549年）が述べられる。アンジローの鹿児島出奔の経緯は正しく、すなわち、アンジロー自身が書簡¹⁰で述べるとおりに記されている。アルヴァレスの船に乗船し、マラッカに渡ってザビエルを知り、後にザビエルを鹿児島に案内し、もてなす経緯もおそらくは資料に忠実に紹介されている。ただし16世紀後半、ポルトガル船が鹿児島にたびたび来航していたことは確かであるが、むしろ中心は当時の鹿児島城下ではなく山川港であろう。

標識灯は奇妙なほど詳しく説明されており、図版はこの詳細な叙述に合わせて描かれている。ちなみに良く似た形の標識灯が449頁の折込図「宮での使節の入城」の右端にも描かれている。

その下には番所があり、反対側には数軒の家が山の斜面に立っている。家々はところどころ岩から屋根を覗かせているのみである。この標識灯はおよそ7リーグ離れないと海からは見えない。なぜなら標識灯の立つ岩が雲を突くほど並外れて高いためである。その麓、やや片側に漁師の小村落²があり、その前の海岸には良い碇泊地がある。



2. 日本の漁師の家 Wooningen der Japanische visschers/Fishermens houses/Cabannes de Pêcheurs（凡例2は前景の家の右上）

これも標識灯の下番所、斜面に覗く数軒の家、岩の麓の漁村と碇泊所と、すべて文章のとおり忠実に描かれている。本文では「漁師の小村落」een visschers gehucht であるが、図版の凡例では「日本の漁師の家」Wooningen der Japanische visschers となっている。

オランダ使節の歓迎

オランダ使節は立派なジャンク船³に乗り、急な川¹³を遡って市内へと向かった。この川は高い山に源を発し、鹿児島のおぼ中心部を貫き、朝鮮海に注ぐ。フランスのローヌ河やハンガリー

⁹ アンジローの名前については「ヤジロー」を採る説もあるが、ここでは岸野久『ザビエルの同伴者アンジロー』吉川弘文館、2001年に従い、アンジローとしておく。

¹⁰ 岸野久、前掲書、26～27頁

のドナウ河の急流といえども、この鹿児島を貫く川に比べれば緩やかに見える。このジャンク船は2本のマストを備え、6本の柱に支えられた天幕を備えている。屋根の縁は高価な金箔の彫刻で飾られていた。船首の前には錨が二つ懸かっていた。尖った甲板が鼻のように船首より突き出ていた。



3. オランダ使節のジャンク船 Jonck van d' 'Hollandsche gesant/Holland Ambassadeurs junk/Barque del' Ambassadeur Hollandois (凡例3は船の右)

ここでは本文と図版の間に明らかな齟齬が認められる。画面中央のジャンク船は明確に凡例3の数字があるが、これはきわめて素朴な1本マストの船である。「2本のマストを備え、6本の柱に支えられた天幕を備え」という本文の説明は、むしろ画面右下の大きな船に対応している(図右)。



画面右下の船

「鹿児島のほぼ中心部を貫き朝鮮海に注ぐ」「急な川」は図版13の「川」に対応する。この箇所、英語版では鹿児島の代わりに Coxenga「国姓爺」となっている (which passeth thorow Coxenga) が、これは明らかな誤植である。¹¹この前に台湾のオランダ拠点ゼーランディア要塞を急襲した国姓爺(鄭成功)についてたびたび言及されているため、誤植が生じたものと推測される。

「朝鮮海」は冒頭で見たように東シナ海を指しているが、稲荷川であれ甲突川であれ、市内を流れる川が鹿児島湾ではなく朝鮮海すなわち東シナ海に注ぐとする地理的説明にはかなり無理がある。



13. 川 De Rivier/The River/La Riviere (凡例13は左上の川面)

小さく高い岩は、いくつか天高くその先端を覗かせており、見る者が恐怖を覚えるほどであった。この岩の間に内へと進む航路が通っていた。岩の間に贅と巧みを極めた水城⁴が現れた。これは日本の皇帝、将軍 Chongon の祖父である大御所 Ongoschio が、太閤様 Taicosama の息子秀頼 Fideri から日本の王冠と王笏を奪おうと決意した時に建てさせたものである。というのは大御所にとって鹿児島はとても重要であった。この都市は薩摩国 Ryks Saxuma のみならず、豊後 Bungo¹² 全体にとっても鍵であったからである。大きな石を積んで海から聳えているこの水城は、方形をしており、深い切れ込みも備えており、ヨーロッパの要塞風である。ここには強力な皇帝

¹¹ 和田萬吉訳では正しく「鹿児島」と修正されている。(前掲書455頁)

¹² 「豊後」はしばしば九州の意味で使われており、『日本誌』収載の日本地図でも九州全体を指している。

(将軍)の守備隊がおり、船はまずここで関税を納めねばならない。



4. 水城 Water-slot/ Water Castle/ Le Château (凡例4は手前右の石垣の陰)

5. 銅の欄干のある石堤 Steene dyck met koopere staeketfels/Stone wall with Iron Rayles/Digue de pierres dont les garde-feux sont d'airain (凡例5は中央の小舟の上の石垣)

急な川を遡る使節の船は岩の間を通過して進むとされる。「見る者が恐怖を覚えるほど」高い岩はこの図には描かれていない。鹿児島湾の実景としては考えられないが、坊津の双剣石のような風景を想定しているのだろうか。

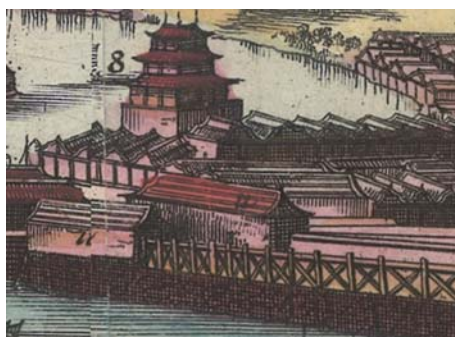
この岩と岩の間に現れる水城は、標識灯の山と並んでこの図版の大きなポイントとなっている。しかしこの記述はどのように読むべきだろうか。大御所とは将軍職を息子に譲って隠居した前将軍を指すが、ここでは豊臣家の覇権を奪おうとしたという説明から徳川家康以外にありえない。また二代秀忠では大御所と孫の関係が成立しない。したがってここで言う「将軍」は三代家光であり、ここから素直にこの文章における「現在時制」を読み取れば、1651年6月に没するまでの家光の治世となる。1669年の『日本誌』の刊行年との隔たりはひとまず措くとしても、家康が秀頼から覇権を奪う際に築かせた城という説明は、どのように解釈しても史実とは相容れない。また将軍の守備隊が駐留し、ここで関税を徴収するという記述も事実とは考えられない。「方形で深い切れ込みがありヨーロッパの要塞風」の「水城」という説明も、17世紀末までの鹿児島の城、すなわち東福寺城、清水城、内城、鶴丸城のいずれにも当てはまらない。なおここで「切れ込み」insnydingen とは独訳ではそのまま einschneidungen であるが、英訳では Redouts となっており、あるいは英語のとおり角面堡、方形堡を指すのかもしれない。

一方、鹿児島が豊後すなわち九州全体の鍵となる土地で、大御所にとっても重要だったという記載は、あるいは関ヶ原以降の薩摩藩と幕府の関係がある程度反映されていると見ることもできるかもしれない。なお本書収載の日本地図は17世紀後半の知見や情報が反映されているものの、なおきわめて素朴なもので、豊後の記載は大分の場所にはない代わりに、九州を横断する形で大きく BUNGO と表記されている。

また嘆賞に値するのは、港に沿って海中から煉瓦を積み上げて築いた石堤⁵である。その最上部の欄干は厚い銅板を打ってある。

水城の左手に続く石堤を描写している。海中から煉瓦を積み上げたという建築はまず日本では考えられない。英訳も独訳も正しく「銅板を打っている」と訳しているが、凡例の英訳のみ「鉄の欄干」となっている。上部のX型の欄干の下が煉瓦となる。この煉瓦の石垣に凡例の数字5が重なっている。

欄干は水城から二棟の大きな番所¹¹に通じており、その番所の外壁は先述の堤に接している。この二棟の番所からは港の素晴らしい景色が眺められる。それぞれの番所には500人の皇帝の衛兵が詰めており、水城内の衛兵と並んで、絶え間なく船に目を光らせている。鹿児島と薩摩全土を屈服させるためにである。つまり薩摩の王は幾度となく勇を奮って皇帝に反旗を翻し、恒例の貢納を拒んだのである。だがいまだ一度として勝利に恵まれたためしはない。しかし幾度も敗北しながらも、新たな勇を鼓して、運に恵まれない戦いを挑むのである。



11. 二棟の大きな番所 Twee groote Wacht-huisen/ Two great watch houses/Deux grands Corps de garde (凡例番号11は欄干に続く二つの建物の壁と屋根)

水城から延びる欄干が二棟の番所（見張り小屋）に通じているという説明はほぼ忠実に図版で描かれている。しかし皇帝すなわち將軍の衛兵がそれぞれの番所に500名ずつ詰めているという説明はどうだろうか？まず「素晴らしい景色が眺められる」番所にしては窓などが一切見られない。また縮尺が不明にしても500人ずつ詰められる大きさにも見えない。何よりもなぜ薩摩の主都たる鹿児島に將軍の衛兵がいるのだろうか？鹿児島と薩摩全土を屈服させるためという説明、また続くその理由、すなわち薩摩の王（藩主）が貢納を拒んでたびたび反旗を翻したとの説明も、関ヶ原以降の薩摩藩と徳川幕府の関係にはまったく該当しないのではないだろうか。



6. 港 De Haven/The Haven/Le port (凡例6は海に通じる石段の左)

この番所の前には安全な碇泊地がある。前述の標識灯が立っている高い山と市の北部との間である。ここにはジャンク船やさまざまな船が数多く来航し、碇泊するか、もしくは岸に繫留される。

位置関係はほぼ説明どおりである。本文には「碇泊地」reede とあるが、凡例では「港」Haven である。



7. 市倉庫の門 Poort van stads pack-huisen/the gate of the City store hous/Porte des Magazins de la Ville
(凡例 7 は左端の海へ下る石段上)

そのすぐ近くに、大きな石を積んで海上に築かれた市の倉庫がある。その中ほどには大きな方形の門⁷があり、その階段は灰色の石灰岩から切り出され、港へと降りている。このようにして、鹿児島へのすべての荷物や商品はここから運び入れ、また運び出される。門の北側の倉庫は4つの大きな広間から成る。しかし反対側の倉庫は二つ合わせの屋根と14の広い部屋、さらに屋根裏がある。この北の倉庫と番所の間で、川が市街を貫いて港に注いでいる。川の一番南側にはきわめて豪華な税関の建物¹²があり、これは技術の粋を尽くしたもので、莫大な費用がかかっている。ここで船は二度目の関税を払わねばならない。これは毎年皇帝に大きな収入をもたらす。

市の中心部に関してモンタヌスの説明が詳細を極める箇所である。つぶさに見ていくことにしよう。まず港 (6) の近くの「大きな石を積んで築かれた市の倉庫」は画面左手の石垣の建物である。その「方形の門」は海から石段の通じている門で、石段に凡例 7 の数字が重なっているのが辛うじて認められる。門には荷物を背負った人が入って行くように見える。「門の北側の倉庫」はその右手で、柱の数から実際4つないし5つの広間が推測できる。「反対側の倉庫」は「二つあわせの屋根」という形容から、二列に延びた長い屋根の建物 (番号6のジャンクの真上) のように見える。とすればこの倉庫と番所 (11) の間で川が港に注ぐという説明も正しく図版に反映されている。



12. 税関 Tol-huisen/Costome houses/Douanes (番号12は中央の屋根の上方に見える)

とすればこの倉庫と番所 (11) の間で川が港に注ぐという説明も正しく図版に反映されている。

しかし詳細に見ると、この倉庫の上には12の番号もかすかに認められる。これを「きわめて豪華」な「技術の粋を尽くした」税関と見るには無理がある。

いずれにせよ、水城に続きここでも関税を皇帝に納めねばならないというが、これも史実とはかけ離れているのではないだろうか。

なお3行目「鹿児島へのすべての荷物や商品は…」 *alle pakken en koop-waaren voor Cangoxuma* は、英訳では *all the Goods and Merchandizes that are brought to Coxenga* と再び *Cangoxuma* が *Coxenga* (国姓爺) と誤記され、和田萬吉も「国姓爺に運ばるる貨物は…」と誤って訳している。¹³



8. 遺体を安置する寺 *Tempel voor doode Licchamen/a Temple for dead bodies/Temple où l'on enterre les Morts*

遺体の安置される日本の寺 *tempel*

しかしこの税関のはす向かいに、豪華な寺⁸がその気高い屋根を天に聳え立たせている。この寺の中には、日本のやり方で火葬が行われるまで、遺体が数日間安置される。僧侶 *Bonsii* はここで多額のお金を稼ぐ。とりわけ裕福な家の遺体を清める際に。これは遺体が阿弥陀や観音、あるいは他の神など、彼らがもつばら仕えてきた神々に快く受け入れられるようにするためである。

モンタヌスは鹿児島の寺 *tempel* をとり上げ、一章を割いて「日本の寺」の紹介を試みている。日本の火葬の風習や阿弥陀、観音などの「神」にも通じているようであるが、遺体を清めるために寺に数日安置するという習慣については寡聞にして事実か否か判断できない。ただモンタヌスの関心はこの寺そのものではなく、いわばこれを糸口にして古典古代に関する博引旁証を繰り広げることにあるように見える。

ここは直接鹿児島や日本に関わる内容を含まず、参照すべき図版もないので、解説を付さずそのまま記載する。なおこの箇所は和田萬吉訳ではすべて省略されている。

しばらく遺体を埋葬せずに、清めた後に火葬に付すというこのような習慣は古来世界で見られる。古代のローマ人やギリシャ人もキリスト誕生前に、死者をこのような方法で扱っていた。ギリシャの悲劇作家エウリピデスはクレオン王をこのように登場させている：

「私は下がろう。イオカステが彼女の息子の亡骸から
汗と臭いと泥を洗い落とせるよう」¹⁴

¹³ 和田萬吉訳、前掲書455頁

¹⁴ 『フェニキアの女たち』(原注)。ただしモンタヌスの引用は必ずしも正確ではない。ここでクレオンは妹のイオカステに自分の息子メノイケウスの亡骸を洗い浄めてもらうために訪ねて来るのである。参考までにこの箇所の邦訳を引用しておく。「老いの身のわしは、老いた妹イオカステを探してやってきた。もはやわが子でないこの骸を洗いきよめ、棺に入れてもらうために。」(『フェニキアの女たち』岡道男訳、筑摩書房(世界古典文学全集第9巻)、1965年、404頁)

「私はダルダニアのイリリア人が」とアエリアヌス¹⁵は伝えているが「生涯三度しか体を洗わないと聞いた。すなわち生まれたとき、結婚するとき、そして最後に亡くなるときである。」¹⁶またユダヤ人も死体の洗浄を行っている。聖ルカはタビタについて述べている：「この頃、彼女が病気になるに亡くなった。彼らは彼女の遺体を洗うと、上の広間に寝かせた」¹⁷。遺体に香油を塗るのも同じくらい古い。タキトゥス、ヘロドトス、デイオドルス・シクルス、ポンポニウス・メラ、キケロ、セクストゥス・フィロゾフス、ルキアヌスなど、不滅のギリシャやラテンの作家は、エジプト人が初めて死体に香油を塗ることを行ったと書いている。この意見に神の言葉（聖書）も一致する。というのはモーゼスは、父祖ヤコブとヨゼフがエジプト人によって香油を塗られたと語っているからである。「ヨゼフは医者である下僕に、彼の父に香油を塗るよう命じている。そして医者はイスラエルに香油を塗った。40日が塗油に費やされた。薬を塗るにはこれほどの日数を要するのである。エジプトびとは70日の間、彼のために泣いた。」「こうしてヨセフは110歳で死んだ。彼らはこれに薬を塗り、棺に納めて、エジプトに置いた。」¹⁸ またセクストゥス・フィロゾフス（エンペイリコス）によれば、エジプト人は死者の体から内臓を取り出し、悪臭と腐敗を防ぐためにバルサムを詰め、家の中に安置し、食事もともにしたという。¹⁹ラテン語の詩人シリウス・イタリクス²⁰はこれについてこう歌っている：

エジプトは死者を弔うに
ふんだんに香料を用いて保存し
香油を塗って仲間の前に出し
宴席をともにさせる

それどころか、エジプト人は時に両親や近い人の遺体を担保として債権者に渡すこともある。もし彼らが生存中に負債を払わなければ、ルキアヌスによれば、遺体は埋葬されないという。このほかに前述の防腐処理には塩、杉^{シダー}油、蜜、蠟、ミルラ、石灰、粘土、アスファルト、硝酸塩が用いられる。死体の洗浄はローマやギリシャでは女性が行っていた。プラトンはソクラテスの言葉を引用している：「女たちが私の遺体を洗う仕事をしなくて済むよう、毒を飲む前に自分の体を洗っておくのが賢明だ。」²¹

¹⁵ クラウディウス・アエリアヌス（アイリアノス）Claudius Aelianus は古代ローマの著述家。170年頃イタリア、プラエネステ（現パレストリーナ）に生まれ222年以降に死去。著作に De Natura Animalium（『動物の特性について』）、Varia historia（『様々な物語』）（ギリシャ奇譚集）など。

¹⁶ アエリアヌス Varia historia（『様々な物語』）第4巻、第1章（原注）

¹⁷ 使徒行伝第9章37節（原注）。和訳は『聖書』1955年改訳、日本聖書協会 1966年を参考にした。

¹⁸ 創世記第50章第2節、第3節、第26節（原注）。和訳は上記『聖書』を参考にした。

¹⁹ セクストゥス『ピュロン主義哲学の概要』第24章（原注）

²⁰ シリウス・イタリクス、112（原注）

ティベリウス・カティウス・アスコニウス・シリウス・イタリクス（25年頃～100年頃）はローマの政治家で詩人。第二次ポエニ戦争に関する叙事詩で知られる。

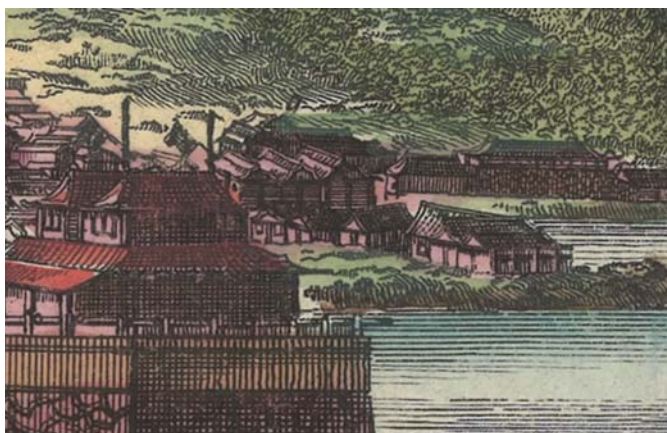
²¹ 『バイドン』（原注）

日本人も、死者の埋葬の準備を寺 **tempels** で行うことをローマ人から学んだようである。というのはローマでは葬式に必要なことはすべて死を司る女神リビティナの教会 **kerk** で買うことができるからである。またローマのヌマ・ポンペイウス王の制度によれば、誰もが子供が生まれた場合はユノ・ルツィナの宝物箱に、また亡くなった者が出た場合は女神リビティナの蓄え箱に、何がしかのお金を投げ入れる義務があった。だが遺体に香油を塗るのは男が務めた。

『日本誌』はこのように、江戸参府記などオランダ東インド会社の記録やイエズス会の資料、あるいは先行する日本関係の出版物を利用しつつ、該博な古典古代の知識を披歴し、当時の水準ではあるが自然科学的考察を展開するというスタイルを取っている。ここでも一見ヨーロッパ人の目には異質と見なされそうな死体の洗浄という風習を、ギリシャ・ローマや旧約聖書さらには古代エジプトまで遡り、比較文明的考察を行っている。²²

さて前述の寺 **tempel** の筋向い、市街側にはきわめて立派な耐火倉庫⁹がある。ここには薩摩全土からの貢納品が収められており、一年に一度皇帝（将軍）の代理人によって大坂に運ばれる。この建物と水城の間には美しい教会 **kerk** が立っており、ここには毎日地元の人々が大勢お参りに訪れ、ほぼローマ人やギリシャ人と同じようなやり方で彼らが礼拝している豊饒と森の神から、作物への恵みを得ようとする。ローマ人とギリシャ人はかつて、山羊の頭と足のついた異教の神パンを羊飼いと狩人の神として崇拝していた。また角と馬の脚を備えたファウヌスに山羊を捧げ、同様に森の神に乳を捧げていた。バッカスは葡萄の守護神であり、武骨なプリアプスは庭園の神、ケレスは穀物を司り、オレイアデスは山の神である。

ここでモンタヌスは再び鹿児島
の描写に戻る。死体を安置する寺
(8) の筋向いの市街側に立つと
いう耐火倉庫がどれを指すのか、
いま一つ判然としない。市街は主
に川の右岸（南）、すなわち向かっ
て左手を指すと考えられる。寺の
筋向いであれば、先ほどの市の倉
庫（7の入口）の近くと推定さ



9. 国の年貢を収める倉庫 Pack-huizen van 's Lands tollen/Store houses with the Contrey tributes/ Magazins des Douanes（中央の建物群の上に9とある）

²² クレインスはこれに関して「モンターヌスは日本の文化を異質なものとして取り上げず、ヨーロッパとの類似性を提示することにより、ヨーロッパの文化と同質であるという認識を示している」と述べている（クレインス、前掲書165頁）。ただしそれが当てはまるのは、当然のことながら架空の事柄ではなく事実に関して比較考察を行う場合に限られるだろう。

れる。ただしその場合、「この建物と水城の間に」立つ「美しい教会」een schoone kerkの位置が不明である。

一方、「寺の筋向いの市街側」を川の（左岸）北と取れば「美しい教会」の立つ場所は想定しやすくなる。図版を拡大して調べると、4の水城の右上の建物群に9の文字が見える。ただし「立派な耐火倉庫」とは見えず、「美しい教会」も水城の陰になるためか、画面上では確認できない。

耐火倉庫については描き方にも疑問が残るだけでなく、薩摩全土からの年貢を1年に1度將軍の代理人が大阪に運び去るという内容の記述も裏付けることができない。

むしろ注目すべきは、ここで「教会」kerk との語が用いられている点である。8の死体を清める「寺」tempel と明らかに区別しているのはなぜだろう？ひとつは僧侶 Bonsii が死体の洗浄でお金を儲ける場所と、古代ギリシャ・ローマの人々のように（ただしギリシャ・ローマの豊饒と森の神への信仰もキリスト教にとっては異教であるが）作物への恵みを祈る場所を、異なる施設として紹介しようとしたこと、もうひとつは初めてザビエルがキリスト教を布教した土地として、教会が存在するものと想定したためではないだろうか？あるいは1606年（慶長11）にドミニコ会宣教師が藩主島津家久の許可を得て京泊（薩摩川内市）に建てた天主堂の情報がここに反映されているのかも知れない。ここでも豊作祈願をギリシャ・ローマと比較するモンタヌスの「比較文化的視点」が発揮されている。ただし、本文の英訳および独訳では「美しい寺」a fair Temple, ein schönes Götzenhaus となっており、8の寺と用語上の区別をしていない。

もうひとつ不思議なのは、図版の10に当たる説明が欠落している点である。凡例ではオランダ語でも「森の神々の寺」とあり、市街の背景を成す山の稜線にはっきりと描かれている。前述の本文によれば、鹿児島の人々は「美しい教会」でローマ人やギリシャ人のようなやり方で彼らの豊饒と森の神に作物の恵みを祈っているのである。「教会」と「寺」の食い違いは措くとしても、この10は教会の位置の説明にも合っていない。この寺は本文では説明されていない、まったく別の寺と考えるべきだろうか？



10. 森の神々の寺 Tempel der bosch-goden/
Temple for the Gods of the forest/Tempel dedie
aux Dieux Champetres (番号10は建物の右に)

引き続き鹿児島の描写

だが鹿児島を貫いて流れる川の南側には、市街が高い山の方へと広がっている。市街は標識灯の立つ高い山に幾分隠れているが、岩の斜面の辺りで再び姿を見せている。市街南の中ほどには美しい教会¹⁴kerkがあり、その屋根は他のすべての建物をはるかに見下ろしている。その内部はきわめて贅沢である。かつて薩摩の王はここに逃げ込み、自らの命を救うべく僧侶にもらった。王は貢納を拒み、皇帝に弓を引いたため、命を失うところだったのである。

小見出しに続けて最後の鹿児島に関する章となる。川の南側、すなわち向かって左手の市街地の

説明である。中央左の高い山に向かって広がる市街と手前の標識灯のある山との関係など、図版は本文に忠実に描かれている。ここで再び「美しい教会」een schoone kerkの言及がある。表現は同じであるが、前述の倉庫と水城の間にある教会とは明らかに別の教会を指している。したがって、モンタヌスによれば鹿児島には少なくとも2つの教会があったことになる。

ここで初めて教会が明確に図版で示される。屋根は三層で、手前に左に敷地を示す柵のようなものが並んでいる。外観が8の寺や4の水城と大きく変わらないのは良いとしても、凡例ではオランダ語も「美しい寺」Schoone tempelと表記されているのはどうしたことが。英語、フランス語の凡例でも「寺」である。先の「教会」や10の「寺」のように翻訳だけでなく原書でも表記が揺れていることを踏まえれば、「寺」と「教会」の区別はあまり厳密に捉える必要がないのかもしれない。



14. 壮麗な寺 Schoone tempel/Stately Tempel/Temple magnifique (凡例14は寺の左に)

さてここでも内容的に疑問とすべき記述がある。ここで「薩摩の王」を薩摩藩主とし、「皇帝」を将軍と読み換えても、薩摩藩主が教会または寺に逃げ込み、僧侶となって自らの助命をはかったという記述、ならびに貢納を拒み将軍に弓を引いたという説明である。江戸幕府になってから薩摩藩が武力をもって幕府に公に敵対したという記録はない。関ヶ原で西軍に加わりながら徳川家に本領を安堵された島津義弘以降、島津家は徳川との良好な関係に努めており、このような記述は伝説としても成立する余地がないのではないだろうか。

さらにこの鹿児島の東の外れには山の頂きのすぐ下に、堅固な石の壁で囲まれた処刑場¹⁵がある。オランダ使節が当地で数日滞り、至るところできわめて丁重なもてなしを受けている間、11人の日本人と3人のポルトガルのローマカトリックの司祭が十字架に磔にされ、火焙りにされた。



15. 処刑場 Gerecht plaats/Place of execution/Le lieu où la Justice s'exécute (番号15は手前の石壁の連結部)

処刑場の位置と外観は本文の説明どおりに描かれている。しかし鹿児島の地理を知るものはここで座標軸の転換を迫られる。処刑場が市の東に位置しているという記述である。つまりこの図版によれば、鹿児島の市街は海の東に広がっていることになるのだ。したがって図版左端に描かれている太陽は昇ったばかりの朝日となり、これは鹿児島の朝の風景ということになる。

処刑場との関連で、ファン・ゼルデレン使節一行が鹿児島に滞在していた数日の間にも、計14名ものキリシタンが処刑されたとの驚くべき情報が伝えられる。ファン・ゼルデレンの参府旅行に

関しては例外的に年月日の記載がないが、1639年の鎖国以降に鹿児島の城下でこのような規模のキリシタンの処刑が行われたとは考えられない。

鹿児島から北西に4里離れたところに山¹⁶があり、その頂上ははるか雲を突き抜けている。唯一テネリフェ島 *Teneriffa* のテレイラ山 *Tereyra* を除けば、地上で最も高い山のひとつと見なされている。というのはこの山は最も天に近いと大方が考えているのである。この山は火炎と軽石と硫黄を雲の上に噴き上げている。



16. 市外4里にある高い山 Hoohe berg vier uuren buiten de Stadt/a Heigh Mountaine four Leagues from the City/Haute Montagne à quatre lieues de la Ville (番号16は左のピークの上)

いよいよ鹿児島の描写の最後である。最後に紹介されるのは図版右奥に聳える怪異な火山である。4里(リーグ)というから1リーグを約5kmとして約20km北西になる。旧市街地の市街を起点にすると直線距離で北西20kmは八重山付近になるが、この700mに満たない非火山を指しているとは考えられない。火山である霧島連山は鹿児島から北東に約45km、桜島は東に約5km(頂上までは8km)であり、いずれも方角、距離とも該当しない。加えて市の北西に位置する山としては画面中央に寄り過ぎて描かれているように見える。

テネリフェ島はスペインのカナリア諸島の島で、テレイラという山名は不明であるが、標高3,718mの最高峰ピコ・デル・テイデ *Pico del Teide* を指すと思われる。テレイラ山を除き、地上で最も高い山のひとつと見なされているとすれば相当な高さを誇るはずであるが、モンタヌスは「大方が考えている」と距離を置き、判断を控えている。ちなみにエンゲルベルト・ケンペルも富士山の高さを述べる際にテネリフェ島と比較している。²³

なおここでも英語版では「鹿児島」*Cangoxuma* が「国姓爺」*Coxenga* と誤記されているが、和田訳では正しく「鹿児島」と直されている。

さて鹿児島に関する記述はここで終わり、使節ファン・ゼルデレン一行は天候の回復を待って、再び江戸への航海を続ける。

しかし図版と本文の齟齬の例として最後にもう一箇所見ておきたい。画面右手、市街向かって右の海上に明瞭に17の数字が記されている。しかし凡例は16までであり、本文においても17に対応する説明はないのである。



凡例17 ただし凡例および本文に説明なし

²³ ケンペル『江戸参府旅行日記』平凡社、1977年、158頁

III

さて、前章ではモンタヌスによる記述と図版を照らし合わせながら、何がどのようにテキストで説明され、図版のどこにどのように描かれているのかを逐一確認してきた。その上で私たちの最大の関心事は、はたしてここに描かれた景色は実景を描いたものなのか、あるいは少なくとも実景に基づくものなのか、テキストの説明は事実あるいは事実を踏まえているのかという問題であろう。近代に至るまでヨーロッパ人によって描かれた日本の情景や人物にはおしなべて強いバイアスがかかっており、むしろ写実性が高まるほどに違和感を覚えるような絵になっていることを宮田珠己は指摘している²⁴が、問題はそれを差し引いてもなお資料的価値が認められるか否かである。

これに関し、鹿児島県の歴史に詳しい専門家の意見は必ずしも一致しない。たとえば松尾千歳は否定的立場から、次のように述べている。

「この図の場合も、画面中央上に『CANGOXUMA』と記されていないければ、鹿児島を描いたものだとわからないような代物である。画面の左右上端にはフランス語とオランダ語の説明がある。それによれば灯台のある高い山、漁師小屋、御城、石築の堤防、オランダ使節の船、死者を埋葬する寺院などが描かれているのだという。当時の鹿児島は、稲荷川沿いに室町時代以来の城下町が開け、さらに鶴丸城を中心とした新しい城下町の建設が進められていた。画面中央の山の中腹に一際大きな建物が描かれているが、それが鶴丸城のつもりなのであるか。また海に突き出た城は東福寺城（現鹿児島市清水町・多賀山公園）のつもりか。左側の大きな岩はいったい何なのだろう。街並みも日本のものというより中国みtainな感じである。山が海岸に迫っているということくらいしか、似た部分はない。このように、この図は実際の様子とはまったくかけ離れたもので、城下の様子を知る資料としては使えない。」²⁵

その一方で一定の資料的価値を認める見解もある。徳永和喜は次のように述べる。

「日本にきた宣教師たちが送った情報から作成したものであるが、かなり精確に描写されている部分がある。この図は稲荷川を中心に、中世島津氏の城郭東福寺城が同河川の左岸に、また、河川口の中世港の感じがかなり把握できる描写といえる。ほかに「桜島」の図がある。」²⁶

また五代夏夫も『桜島の顔』において「オランダの使節が帰国して、本国の画家に説明して描かせたもので、多分に画家の想像が加わっていて、事実の真景は無理だが、それらしい情景から彷彿する鹿児島港湾の状況である」と述べている。²⁷

²⁴ 宮田珠己『おかしなジバング図版帖 モンタヌスが描いた驚異の王国』パイ インターナショナル、2013年

²⁵ 松尾千歳『鹿児島歴史探訪』高城書房、2005年、72～73頁

²⁶ 『海洋国家・薩摩 - 薩摩に鎖国はなかった - 』（黎明館開館15周年記念特別展図録）、鹿児島県歴史資料センター黎明館編、1999年、115頁。ただしここで言う「桜島の図」とは「シウルプラマ山」であり、Voari（尾張？）の国にあり都（京都）から8里のところにあるとされている。この文脈からも桜島を指すものではない。

²⁷ 五代夏夫『桜島の顔』高城書房、1989年、44頁。ちなみにモンタヌスの図版の奇妙・珍妙な側面に注目した宮田珠己もCangoxumaについては一言も言及していない（前掲書）。これは少なくとも他の荒唐無稽な図版に比べて、ある程度の写実性が感じられたためではないかと思われる。

すなわち徳永も五代も、実際に日本に来た宣教師や使節が伝えた情報をもとに作成された図版として、ある程度の写実性と資料的価値を認めているのである。

『日本誌』の図版については、翻訳者の和田萬吉も「圖中人物等の畸異なるは、見聞者の見取圖に基づきて本國なる畫家の想像を加へたるに由れるならん」と述べ、見聞者の日本における実際のスケッチに基づいてオランダの画家が想像を加えて描いたとしている。

確かに奇想天外な画が少なくない反面、即物的とも言える平戸オランダ商館や雄大な大坂城など相当の写実性も認められる挿図もある。これについて金井圓は「平戸・長崎の商館、大坂城と大阪市街、京都・江戸・堺の眺望など、実地の写生もしくは実見に基づく実景画も多く、後者はとりわけ価値が高い」と述べている。²⁸さらに大坂城図に関しては「オランダ人がまだ国内歩行の自由であったころ、たぶん日本人の協力で作画した鳥瞰図」と推測している。²⁹

またクレインスはモンタヌスの図版の持つ「ある程度の正確さ」を指摘し、京都の風景画について「京都のかなり正確な外観が読者に提供されている」と評価する。そしてこうした絵を描くにあたって、オランダの画家がなんらかの原画を参考にしたのではないかと推測している。加えて、モンタヌスが利用したオランダ商館員の日記の中に、商館員が江戸参府中に描いたスケッチが含まれていた可能性もあるとする。その根拠として商館員ワーヘナールが実際にスケッチを描いていたことが知られていると述べる。逆にモンタヌス自身もそうしたスケッチを参考に文章を書き進めていたと推測している。³⁰

こうした推測は『日本誌』が表題で「日本で描かれた多数の絵による装飾」vergiert met een groot getal afbeeldsels in Japan geteikent と謳っているためでもあろう。

しかし私は少々範囲を広げ過ぎたようだ。本論で問題となるのは、『日本誌』の図版全般の資料的価値やモンタヌスの筆の進め方ではなく、あくまで Cangoxuma の図版が実景に基づいているか否かであり、鹿児島に関する叙述に信憑性があるか否かの一点なのである。

図版に関してはオランダで作成されたことは明らかであるので、もとよりヨーロッパ人のバイアスがかかることは避けられない。だがすでに前章で見てきたように、当時の日本や鹿児島について若干たりとも知識を持つ読者ならば、鹿児島に関する叙述に違和感を覚える箇所が少なくないのである。そこで本章ではまずテキストについて疑問点や問題点を整理したい。

1) 使節ファン・ゼルデレンの実在性

まず問題となるのが使節ファン・ゼルデレンの存在である。長崎オランダ商館長に関しては平戸

²⁸ 金井圓 『江戸西洋事情』新人物往来社、1988年、109頁

²⁹ 金井圓、前掲書、口絵解説。また有坂隆道も、「在日オランダ人がこの鳥瞰図を作り、その資料がオランダ東インド会社に入り、ヨアン＝ブラウを通じてヴィンボーンズの手に渡り、それを基にしてモンタヌスの挿図が出来上がった」と推定している。(有坂隆道「オランダ三話」(同編『日本洋学史の研究』創元社、1977年所収、231頁)

³⁰ クレインス、前掲書156～158頁

商館時代の1609年のジャック・スペックスに始まり1860年のヤン・ヘンドリック・ドンケル・クルティウスまですべて確かな記録がある³¹が、この中にファン・ゼルデレンの名前はない。

また江戸参府についても、1609年のアブラハム・ファン・デン・ブルックとニコラース・ポイク（いずれもオランダ船隊特使）から1850年のヨセフ・ヘンリー・レフィスゾーンまで、すべて参府した日付や長崎出発ならびに帰着の日を含めて判明している³²が、ここにもファン・ゼルデレンの名前はない。

これに関してクレインスはファン・ゼルデレンという人物はまったく不明であり、日記の日付の記載がないため、いつの江戸参府であったかも同定できない、ファン・ゼルデレンという名前も偽名である可能性が高いと述べている。³³

一方ペーター・リートベルゲンはファン・ゼルデレンの江戸参府を1666年と「同定」しているが、この年の江戸参府は商館長ウィレム・フォルヘル Willem Volger である。この「同定」については次に検証する。

2) ファン・ゼルデレンの参府記録の信憑性

しかし仮にファン・ゼルデレンという名前が偽名だとしても、その報告の真実性までもが否定されたことにはならない。たとえば偽名の可能性を指摘したクレインスは「ファン・ゼルデレンの日記もまた日本に関する新しい情報を提供している」とその報告に資料的価値を認めている。³⁴また楠家重敏もモンタヌスの叙述の誤りをいくつか指摘しながらも、「最後は日付は書かれていないが、ファン・ゼルデレンの江戸参府の旅で締めくくられている」と述べ、他の実在の使節の記録と同列に捉えている。³⁵しかし鹿児島漂着を含むこの参府旅行を真実と考えるには、以下の疑問が残る。

まず長崎を出港した直後に嵐に遭い、鹿児島に漂着したという記述である。そもそも萬治2年（1659）の帰路以降は、海路の危険に配慮して長崎・小倉間は海路から陸路に変更されているのである。³⁶加えてオランダ使節の江戸参府に関しては、随行者に関する規定、荷物の輸送に関する規定、大阪や京都、江戸到着の際の奉行への出頭（罷出）に関する規定、旅程に関する規定（小倉までは陸路、それより大阪までは渡海）、見物の許可（京都の清水大仏）など細かな規定があり、恣

³¹ たとえばオランダ文科省の所轄する国立文書館のホームページ（Nationaal Archief, Ministerie van Onderwijs, Cultuur en Wetenschap）の商館長一覧（文書番号1.04.21）などを参照。

³² 金井圓『日蘭交渉史の研究』（思文閣）1986年、170頁～192頁

³³ クレインス、前掲書155頁。

³⁴ クレインス、前掲書188頁～189頁。

³⁵ 楠家重敏『モンタヌス『日本誌』のみどころ』。島田孝右編『モンタヌス『日本誌』：英語版』。柏書房、2004年、56頁

³⁶ 金井圓、前掲書169頁。『通航一覧』の記録では「萬治二己亥年、これより先、参府の阿蘭陀人平戸を廻り、筑前の海上を乗船せしか、ことしより豊前國小倉まで、陸地、長門國下の關より、大坂まで乗船の例となる」とある。（『通航一覧』第六、卷之二百四十一、清文堂出版、1967年（復刻版）、207頁）。エンゲルベルト・ケンペルもこのルートに変更について記している。「以前にはわれわれも同じ船で同時に長崎から出帆したが、しかし一度ひどい暴風雨に遭って難破し、生命の危険を感じたので、安全を考えて大阪〔小倉の誤り＝原著者註〕まで陸路を行くことが、將軍から認可された。」（ケンペル、前掲書62頁）

意的な変更は許されない³⁷。

仮に長崎出航後に朝鮮海すなわち東シナ海で嵐に遭ったとしても、鹿児島に漂着することは極めて想定困難である。「東北からの」強風を受け、一旦東シナ海に流されたとして、そこから天草灘、甕海峡を抜けて、薩摩半島をぐるりと回り、都合よく鹿児島湾に入港することができるものだろうか。むしろ寄港するとしても阿久根、甕、京泊、坊津、山川など、鹿児島に限っても良港は数多くあり、そのいずれかに避難あるいは漂着する方がはるかに自然である。とりわけ薩摩半島のそれぞれ西南端と東南端の坊津と山川は、元禄の頃の薩摩國絵図に「何風二ても船繫り自由」(どんな方角から風が吹いても船の繫留が自在である)と記されている。³⁸薩摩半島を廻航しながら、こうした途中の港に漂着または寄港しなかったとは考えにくいのである。

また鎖国体制下、オランダ使節を乗せた船といえども、薩摩藩は鹿児島に漂着しないし来航する船に対して常に各地の遠見番所で最大限の警戒をもって対応したであろうし、すぐに長崎および江戸に注進に及んだであろう。そうした記録が『通航一覧』や『徳川實記』、そして薩摩藩の記録『旧記雑録』には見当たらないのである。³⁹

「至るところで歓待を受けた」という「数日間」の鹿児島滞在についてはさらに疑問である。たしかに、「搦め取るか討ち果たすべし」という南蛮船への厳しい対応とは異なり、薩摩藩は漂着したオランダ船に対しては唐船同様に薪水や食料の提供を指示しているが、できるだけオランダ人を上陸させず、厳しい監視を付け、地元民と接触させないという規定⁴⁰は、オランダ使節一行とても免れなかったことであろう。加えて鹿児島滞在の記述はきわめて具体性に乏しい。たとえば入港や上陸の際に当然問題となる薩摩藩の異国方とのやり取りについて一切の言及がないばかりか、誰一人鹿児島において具体的な人名とともに紹介されている人物はいない。ちなみに鹿児島に限らず、人名の欠如は日付の欠如と並び、ファン・ゼルデレンの参府記録を貫く特徴であり⁴¹、この点で

³⁷ 『通航一覧』(第六)の「阿蘭陀人江戸に罷上候前後覺」などを参照。

³⁸ 南さつま市坊津歴史資料センター輝津館の展示資料解説より。また宝暦2年(1752)の「薩州分国演説記」にも同様の記載がある(山川町編『山川町史』増補版、2000年、392頁)。

³⁹ 異国船の漂着については寛文元年(1661)6月24日の項に、国姓爺による台湾襲撃から逃れたオランダ船が長崎に逃れてきたこと(徳川實記(第四篇)388頁)や、寛文4年(1664)3月28日の項に「二月一日 朝鮮の商船去年十一月十日隠岐國浦の江といふ地に漂着せしむね。松平出羽守直政より注進す。朝鮮の商人は崎港に引きわたし。本國に送るべきよし下知せらる。」(同492頁)という朝鮮商人の漂着の記録がある。

また薩摩による琉球漂着のオランダ人とイギリス人の送還(1626年8月)の記録も残る：「寛永三丙戌年八月二日、薩摩より琉球に漂着の阿蘭陀人、諺厄利亞人六人を送り来る、同年歸帆の蘭人に渡され、歸國せしむへき旨命ぜらる」(『通航一覧』巻之二百五十一)。

『旧記雑録追録』には、たとえば正保4年(1647)のポルトガル船の長崎来航に関する記録や萬治3年(1660)7月の八重山近辺におけるオランダ船破損の記録などは詳しく載っているが、オランダ商館が平戸から長崎に移った寛永18年(1641)以降、『日本誌』の出版される寛文9年(1669)まで、オランダ船の鹿児島漂着の記録はない。

⁴⁰ 『鹿児島県史』第二巻、鹿児島県編、1940年、654頁～655頁。寛文4年(1664)3月朔日の異國方條書の規定として紹介されている。

⁴¹ ファン・ゼルデレンの参府旅行記において名前で言及される日本人は、宮(愛知県)で出迎えた地方官オビルハム・ギアントドノ Obirham Giantodono および膳所からパウロママ山までファン・ゼルデレンに同行したという領主バスロ・ミコンドノ Basuro Micondono だけである。いずれも日本名とは考えにくく、いまだ同定されていない。

『日本誌』所収の他の使節による参府記録と大きく異なっている。

桜島についての言及がないことも信憑性を疑う理由になる。天候によって視界が利かなかったことも想定できるが、西北4リーグの火山に言及して、東1リーグの桜島に触れないことは考えにくいのである。

さらに実際江戸参府を果たしたとすれば、將軍拝謁の日も問題となる。長崎から鹿児島への漂流、数日間の滞在、そして再び平戸瀬戸から峯岐水道を経て小倉まで、短く見積もっても10日から2週間は余計に要したであろう。⁴²使節ファン・ゼルデレンには江戸参府の遅れを心配する様子もなはいばかりか、途中、膳所ではパウロママ Pauromama なる山に遊び、ここでも饗応を受けている。こうした寄り道が許されたかはここではひとまず措く。

片桐一男によれば、オランダ使節の江戸参府の時期は当初前年の暮に長崎を出発して翌年の正月に江戸に到着、拝礼を行ったが、1661年（寛文元）からは正月に長崎を出立し、3月朔日（太陽暦で4月上旬）もしくは15日に拝礼をするのが例となったという。⁴³ファン・ゼルデレンの拝謁がいつの年かは不明ながらも、1660年から70年代について見れば、3月1日（1662年、63年、65年、69年、70年、71年、73年、75年、79年）または3月15日（1666年、74年、76年、78年）が多く、1661年と72年は3月3日、1664年は3月28日、1667年は2月15日、1668年は2月28日となっている。⁴⁴

1664年の拝謁が遅れた理由は不明であるが、『徳川實記』の記録では「3月28日蘭人御覧あり」と例年通りの簡潔な記載で、江戸を離れる際も「4月7日蘭人に暇下され。時服給い。條約よみ聞かしむる事例のごとし」とあり⁴⁵、特段の事情があったとは窺えない。つまり、嵐に遭って大幅に遅参した江戸参府の記録は見当たらないのである。

3) その他の記載の矛盾

『日本誌』の記述がしばしば事実と異なることはほぼ同時代のケンペル⁴⁶以来、たびたび指摘されている。鹿児島についても、薩摩の王（藩主）と皇帝（將軍）の関係をはじめ、首を傾げる内容がきわめて多い。しかしこうした誤りは言い伝えと考えられるものもあり、それをもって即座に使

⁴² 1日の航程を推測するのは難しいが、ケンペルは「海上では用心して夜は旅を避けるので、非常に船足が早い時でも1日に40海里以上は行けない」と述べている。（ケンペル、前掲書63～64頁）。また1561年ルイス・デ・アルメイダは熊本の玉名近辺から「20レグワ程も離れていると思われる」阿久根まで船で向かったが、逆風のために約13日もかかっている（ルイス・フロイス『日本史（2）キリシタン伝来のころ』1965年、平凡社、90頁）。

⁴³ この変更の経緯については『徳川實記』の萬治3年（1660）2月3日の記録に「蘭人に暇たまはり。條約讀聞せらるゝ事例のごとし。請まゝに明年より三月中参府すべしと仰下さる」とあり、オランダ側の要請があったことが窺える。（『徳川實記』第四篇、吉川弘文館、1981年、343～344頁）

⁴⁴ 片桐一男『江戸のオランダ人』、中公新書、2000年、60～61頁。そのほか金井圓『日蘭交渉史の研究』175～176頁、および『徳川實記』第四篇。

⁴⁵ 『徳川實記』第四篇、496～7頁

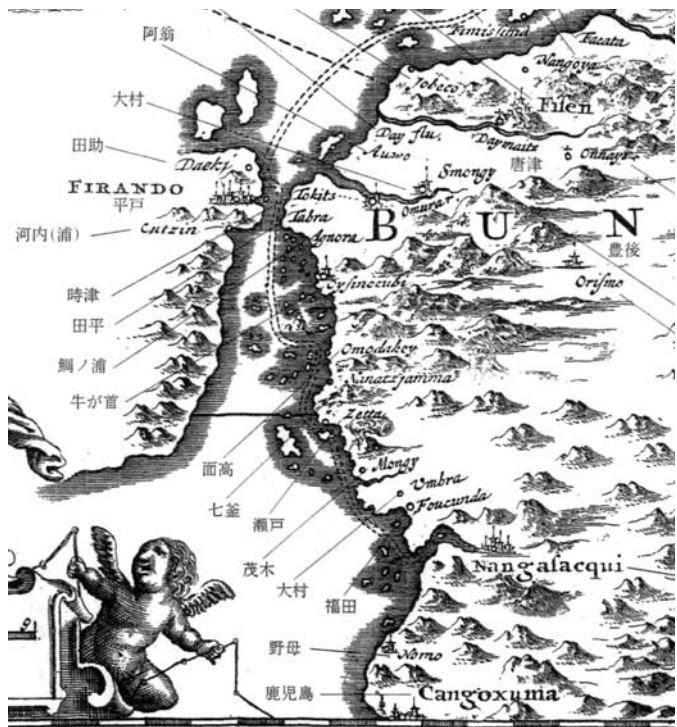
⁴⁶ ケンペルは將軍謁見の広間について「モンタヌスが想像し紹介していたのとは、ずっと違っていた」と述べている（ケンペル、前掲書、191頁）。また楠家重敏はモンタヌスの紹介するフリシウスとブロークホルストの江戸参府の日付などの誤りを指摘している。（前掲論文54頁）

節の鹿児島滞在の可能性を否定する証拠にはならないであろう。

しかし、使節の滞在中の出来事として「11人の日本人と3人のポルトガルのローマカトリックの司祭が十字架に磔にされ、火焙りにされた」と伝える場合、これは旅行記の真偽に関わってくる。日付の記載がないため、この報告を根拠なしと証明するのは難しいが、萬治元年（1658）6月の「吉利支丹出申國所之覚」によれば、薩摩國からは「十七年以前午年、南蠻伴天連四人、日本伴天連一人、同宿四人、薩摩浦へ着船仕候を捕へ候て、長崎へ遣申候」とある⁴⁷のみで、他に報告はない。つまり少なくとも1642年から1658年まではキリシタンの捕縛や処刑の事例はなかったと考えてよいのではないだろうか。また1669年までの『徳川實記』や『通航一覧』などにも類似の記録は見当たらない。⁴⁸そもそもポルトガル人に関しては1639年の鎖国体制の完成以降、来航すら禁じられているのである。また「十字架に磔にされ、火焙りにされた」aan kruisen gespykert, en by langzaam vuur verbrandt という火刑の方法も当時のカロンやハイスベルツの報告と異なる。⁴⁹

最後に問題となるのが鹿児島の地理、とりわけ市街と海の位置関係である。オランダ使節の船が長崎を出て嵐に遭い、鹿児島城下に漂着するという不自然さはすでに指摘した。また処刑場の説明によれば、鹿児島の市街地は海の東側に位置することになる。さらに鹿児島市街を貫流する川は朝鮮海すなわち東シナ海に注ぐとある。一体、どうしてこのような記述になったのだろう。

この疑問を解く鍵は『日本誌』に添えられた九州の地図にあると考えられる。鹿児島 Cangoxuma が九州の西海岸に位置する形で記載されているばかりか、長崎 Nangasacqui のすぐ南に位置しているのだ。その距離は平戸 FIRANDO から長崎の距離のほぼ半分である。その間には島原もなければ甕島も存在しない。このような地図であれば、長崎から北東の強風を受けて鹿児島に来航した



モンタヌス「日本誌」英語版（柏書房）2004年より BUNGO（部分）

⁴⁷ 『通航一覧』第五、巻百九十六、204頁（萬治元年六月十六日の項）

⁴⁸ そのほか茂野幽考『薩摩切支丹史料集成』南日本出版文化協会、1966年にも記録はない。

⁴⁹ カロンとハイスベルツによれば、罪人は十字架に磔にされるのではなく、地面に立てた柱に縄で片手または足を縛り付けられたという。（フランソワ・カロン『日本大王国志』平凡社、1967年、155～156頁およびライエル・ハイスベルツ『日本殉教者の歴史』（カロン『日本大王国志』194頁、197頁）

という説明や、市の東に山があるという記述、また川が朝鮮海に注ぐという説明もすべて納得が行く。

これを要するに、地理的な記載の矛盾は、ファン・ゼルデレンの参府旅行記の報告者がこの地図に依拠して叙述したためと解釈することができないだろうか。Cangoxuma の図版が何らかの下絵に基づく可能性はなお完全に排除できないにしても、鹿児島についての報告に関しては、実際に鹿児島を訪れたオランダ人によるものとは到底考えられないのである。

IV

それではファン・ゼルデレンとは誰だろう。あるいはファン・ゼルデレンの参府旅行記の報告者は誰だろうか。まず『日本誌』の成立経緯を確認しておこう。

クレインスは『日本誌』の二部構成に着目し、第一部がフリシウスの江戸参府日記にイエズス会士やオランダ人による情報を数多く付け加えた「完結した著作」になっているのに対して、ファン・ゼルデレンの日記を含む第二部の江戸参府日記にはさほど多くの情報追加が施されていないと性質の違いを指摘する。そして、1668年までに完成していた第一部の出版準備を出版者のメウルスが進めているうちに、複数の江戸参府日記を1668年中に入手する機会に恵まれたため、これを急いでモンタヌスが編纂し、第二部として追加して翌年の出版に間に合わせたというヘッセリンクの仮説を紹介し、さらに第二部のそれぞれの記録の入手ルートと入手年を推定している。⁵⁰ヘンドリック・ハメルは朝鮮幽囚の記録も含め、これらが1668年にモンタヌスの手許に集まったとする両者の説には説得力がある。

唯一、ファン・ゼルデレンの江戸参府を「1666年と同定している」⁵¹リートベルゲンも、基本的には参府記録が年代順に紹介されているとの立場に立っているようである。

「このようにして読者はフリシウスが旅をした1649年から1650年の、ワーヘナールが二度の旅行をした1657年と1659年の、インダイクの目を通して1661年の、そして最後にファン・ゼルデレンの報告を通して1666年の日本を眺めるのである。」⁵²

ここでリートベルゲンはファン・ゼルデレンについて、ワーヘナールやインダイクと同様に江戸参府を行った実在の使節と考えている。しかしその際、1666年3月15日の参府（將軍拝礼）記録の残る商館長ヴィレム・フォルヘルとの関係については一切触れていない。⁵³

⁵⁰ クレインス、上掲書154～155頁。ただし、唯一ファン・ゼルデレンの江戸参府日記は人物を含めてまったく不明で、名前も偽名である可能性が高いとしている。

⁵¹ クレインス、上掲書245頁（注195）

⁵² Peter Rietbergen, Japan verwoord. Hotei, 2003, p.203. 訳は筆者の試訳である。

⁵³ リートベルゲンがファン・ゼルデレンの参府を1666年と考えたのは、おそらくフリシウス、ワーヘナール、インダイクと年代順に参府記が紹介されているためであろう。しかしインダイクとファン・ゼルデレンの参府記の間には、ヘンドリック・ハメルらの朝鮮幽囚の記録が挟まれており、1666年初春の参府記と比定すれば、1666年9月に朝鮮から長崎に逃れ来たハメル一行の記録と時間が相前後することになる。

リートベルゲンは続けてワーヘナールだけでなくファン・ゼルデレンも旅行の際にスケッチを残した可能性を述べている。

「同様にモンタヌスによってほぼ文字通りに記録されたファン・ゼルデレンの言い回しは、この江戸旅行者がたぶん彼の目に留まったものをスケッチしたことを示している。シウルプラマ山の描写はその一例である。」⁵⁴

だが火山シウルプラマ山 Sjurpurama の描写は使節インダイクの旅行記であり、「後にオランダ使節ゼルデレ Zeldere⁵⁵ が詳しく観察することになる」と予告されているものの、ファン・ゼルデレンが訪ねるのはパウロママ山 Pauromama である。つまりここはリートベルゲンの誤読である。また私たち日本の読者は「大きな湖水のほとり」にあって炎と煙を吐く「都（京都）から 8 里」の火山の存在を知らない。⁵⁶ リートベルゲンの「同定」は、少なくともこの彼の著作における限りすべて推測に留まっている。

同定があらためて振り出しに戻った今、ファン・ゼルデレンの旅行記の作者について、筆者の推測を述べてみたい。

前述の『日本誌』の成立経緯を踏まえると、第一部に含まれないファン・ゼルデレンの参府日記がフリシウス（1650年）以前の記録である可能性は低い。

またこれまで確認したところから、旅行記の作者は決められたルートによる決められた日の江戸参府の実情を知らず、長崎 - 小倉間の陸路への変更にも通じていなかった者となる。また長崎から鹿児島までの距離や航路、鹿児島の地理、そして鹿児島に漂着した場合、オランダ使節の船といえどもまずは薩摩藩の異国方の取り調べを受け、鹿児島から長崎や江戸に注進が行くという事情も知らなかったのではないだろうか。したがって、長崎商館に滞在経験のあるオランダ東インド会社の関係者が書いた記録とは考えられない。

また採録されたハメル一行の記録から『日本誌』の出版に至るまでの期間が短いこと⁵⁷ から、この間に第三者によって偽書が創作され、著者モンタヌスの手に届いた可能性も低いと推測できる。

⁵⁴ Rietbergen, 上掲書, p.203

⁵⁵ オランダ語版（前掲書）416頁。Zelderen ではなく Zeldere と表記されている。

⁵⁶ 島田孝右編『モンタヌス「日本誌」：英語版』は付属の地図上のシウルプラマ山を「伊吹山」と同定している。しかしシウルプラマ山は活火山とされていることに加え、地図では琵琶湖と思われる大きな湖水の西に位置していることから伊吹山ではありえない。むしろパウロママ山の方が伊吹山の位置に近い。

⁵⁷ クレインスによれば、モンタヌスが掲載したのは「インダイクが乗組員から直接聞いた記録」であるという（クレインス, 前掲書186頁）が、インダイクは1664年にバタヴィアで亡くなっているものでありえない。インダイクではなくモンタヌスが1668年7月20日にオランダに帰国した（ハメル, 前掲書73頁）乗組員から直接聞いたとしても、『日本誌』の刊行まで1年しかない。ただしモンタヌスがそれ以前にファン・ゼルデレンの参府記を入手し、準備していたとすれば別である。しかしその場合は、なぜ「さらに詳しく見る価値のある」ファン・ゼルデレンの参府記をハメルの記録の前に置かなかったのかという疑問が残る。

つまり参府旅行記の筆者としてモンタヌス以外を想定することは難しいのである。

ファン・ゼルデレンの旅がヘンドリック・ハメルらの朝鮮幽囚の記録に続く形で「しかしファン・ゼルデレンが長崎から日本の皇帝を訪ねた旅行は、さらに詳しく見る価値がある」と始まることはすでに述べた。しかしその直前の内容、すなわち1653年8月16日、ヤハト船デ・スパールウェル号で台湾から長崎に向かっていたハメルの一団64名が嵐に遭って済州島に漂着し（36名が生き残る）、13年間におよぶ朝鮮での捕虜生活の後、ハメルを含む8名が小船で脱出を図り、1666年9月8日に五島列島に逃れ着いたという驚くべき冒険譚⁵⁸より「詳しく見る価値がある」とは思えない内容の希薄さである。インダイクやハメルらの記録の持つ具体性や迫真性に欠ける文章こそ、事実や記録に基づかないフィクションの何よりの証拠かもしれない。

代わりに原文でわずか15頁（436頁から450頁）のファン・ゼルデレンの旅行記は、「鹿児島」、「都の奉行の行列」、「パウロママ山」、「宮でのオランダ使節の出迎え」と、大判の折込4幅で彩られている。⁵⁹「鹿児島」を除けば、宮田珠己が採り上げている⁶⁰ように、いずれもきわめて違和感に満ちた奇想天外な図版と言える。現実性や具体性に乏しい本文の内容を図版が努めて補っている印象を受けるのである。

最後にファン・ゼルデレンの旅行記の著者をモンタヌス自身と推定するに当たり、興味深い符号をひとつ紹介しておこう。ゼルデレンの参府旅行記は「ファン・ゼルデレンの旅」Van Zelderens reis という小見出しで始まり、10月の出島での市の模様を述べた後、「長崎の山」Bergen om Nangesaque という短い一節に続く。

二つの小見出しの最初の語を続ければ、Van Bergen すなわちモンタヌスの本名 van den Berg（または van Bergen）にほぼ重なるのである。ちなみに Berg, Bergen は「山」を意味し、Montanus は「山」のラテン語形である。すなわちモンタヌスはファン・ゼルデレンの旅を綴るに当たって、ここで自ら真の作者をあらかじめ明かしているのではないだろうか。⁶¹

このように見てくると、当時の鹿児島の様子を知る歴史資料としての価値に関しては、鹿児島に

⁵⁸ ハメル一行の冒険については母国オランダでの関心も高く、1668年にはハメルの報告書にもとづいて数種類の出版物が刊行された。そのうち、ヤコブ・ファン・フェルセンによる第一版と第二版（いずれも1668年アムステルダム刊）には、朝鮮王国に関する記述の部分が省略されているという（ハメル、前掲書241頁、訳者生田滋の解説）。モンタヌスの記載は細部で異なる点も多いが、全体の構成は極めてハメルの記録と似ている。それを考えればこのフェルセン版なども参照しているのではないだろうか？ またいくつかの箇所でもヨハンネス・ステイヒルによる刊本（1668年、ロッテルダム）[St.本] との同一箇所もある。生田は「1669年に刊行されたモンタヌスの『日本誌』（429～436ページ）にその概要が引用され」と述べている。（ハメル、前掲書242頁）

⁵⁹ ちなみにその直前の使節インダイクの江戸参府を含む24頁の記述（406～429頁）には、本文頁への挿図は4点あるものの、折込としては「火を噴く山」（シウルブラマ山か？）1点しかない。

⁶⁰ 宮田珠己、前掲書

⁶¹ ここに著者の名前が折句のように隠れているとの推測を補強するのが、この章と見出しの恣意性である。長崎は「驚くほど高い山の間にある」と始まり、山の斜面には切通しが設けられ、水を堰き止めたり引き入れたりしていること、土壌が豊かで米や麦などあらゆる作物が取れることを述べている。しかし特記するほど長崎の山は高くもなければ（烽火山で426m、英彦山で401m）特徴的とも思えない。また内容にさほどの価値がないことは、独語版においてこの節がすべて省略されていることから窺える。

関する記述も Cangoxuma の図版も残念ながら否定せざるを得ない。⁶² それではなぜ参府経路にも位置せず、長崎商館関係者からの資料も乏しいと思われる鹿児島を、わざわざ参府行路を曲げてまで訪ねたのだろうか。これについても推測の域を出ないが、筆者の考えを述べておこう。

『日本誌』においては長崎オランダ使節の参府旅行だけでなく、イエズス会士の書簡や先行する日本文献など種々の情報が網羅的に取り入れられていることは冒頭で紹介した。そのため、鹿児島に関してはアンジローの鹿児島出奔に至る冒険譚やザピエルとアンジローの布教活動、あるいは関ヶ原における島津義弘の敵中突破についても第一部で言及されている。となれば初めてポルトガル人、すなわちヨーロッパ人が到着し、初めてキリスト教が伝えられた強大な「薩摩王国」の主都について、図版を添えてあらためて詳細に紹介しようとするのは無理からぬことではないだろう。

こうして、モンタヌスの叙述をもとにオランダ本国で描かれたと推定される鹿児島の図版であるが、細部まで描き込まれた情景は数ある挿図や折込図の中でも際立って美しい。

今しも朝日が昇り、雲をほのかに赤く染めている。標識灯のある山は朝日を受けて輝いている。麓の漁村ではすでに一日が始まり、老いも若きもそれぞれに活動している。穏やかな湾にはさまざまな種類の船が無数に浮かんでいる。漁師は魚を取っている。城下町は川の両岸に節度をもって広がり、緑を市内に取り込みながら、見事に自然と融和している。抒情性溢れる豊かで平和な風景である。

『日本誌』の出版された17世紀後半、ヨーロッパは三十年戦争の戦禍から回復する間もなく、引き続き戦乱に脅かされる不安定な大陸であった。オランダはスペインとの八十年戦争を経て1648年のヴェストファーレン条約で独立を果たしたものの、1652年には第一次英蘭戦争、1667年には第二次英蘭戦争と戦争が続いた。また同年、ルイ14世の軍はスペイン領フランドルに侵攻するなど、戦火の絶えない不穏な時代であった。

一方、長崎商館長ワーヘナールが伊万里焼を大量に注文し、ヨーロッパに送ったのも同じ時期である。中国や日本からの陶磁器は王侯貴族の館を美しく飾った。戦乱のヨーロッパとは対照的な平和と調和の世界として、中国や日本、インドなど遠い異国への憧れが掻き立てられたであろうことは想像に難くない。Cangoxuma の美しく穏やかな世界には、モンタヌスをはじめとするそうしたヨーロッパ人の憧れが反映されているのではないだろうか。とすれば、逆説的に聞こえるが、架空の旅行記と都市景観図には著者や読者の鹿児島に対する強い関心が窺えるのみならず、当時のヨーロッパを映し出す資料的価値もあるいは認められるのかもしれない。

⁶² しかしたとえモンタヌスの創作によるとしても、どの程度モンタヌスが鹿児島に関する文献や図版等を利用したのかについてはさらに綿密な調査と考察が必要になるだろう。Cangoxuma の図版についても、オランダ人の画家がモンタヌスの記述だけに拠ったとは断定できない。本論では鹿児島に関する記述に限定したが、今後はファン・ゼルデレンの参府記全体について、折込図も含めて検証することが求められるだろう。

後記：本論を作成するにあたり，鹿児島県歴史資料センター黎明館からは同館所蔵の貴重な Cangoxuma（フランス語の凡例があることからフランス語版用の銅版画と思われる）の閲覧許可を得た。これにより，彩色版では不鮮明な凡例の数字が判読できた。オランダ語の不明箇所に関しては本学の大野克彦教育学部准教授の教示を受けた。ただし最終的な訳文に関しては筆者の判断である。また寺邑昭信鹿児島大学名誉教授には種々の資料の提供を受け，数多くの貴重な教示と助言を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

参考資料

1. 『日本誌』よりオランダ語原典、英語版、独語版の該当箇所を以下に引用しておく。
2. 巻末に筆者の入手した銅版画 Cangoxuma (彩色版、約567mm×275mm) を80%に縮小して添付する。右上に英語またはフランス語の凡例の記載がないことから、オランダ語版またはドイツ語版用の図版と考えられる。印刷年や彩色の年は不明である。

原典 (オランダ語版)

Doch de Hollandtsche gesant, zyn water-reize na *Jedo* vervorderende, wierdt van zoodanige storm uit den noord-oosten in *de Coreer Oceaen* belooopen, dat hy met schoover-zeil afzakte: en voorts binnen de haven voor *Cangoxuma* ob de vuur-baak aan liep. Deeze vuur-baak is eertydts by *de Portugeesen*, met goed vinden *der Japanders*, gesticht, wanneerze aldaar vrye handel-plaats genooten.

Beschryving der maghtige stadt Cangoxuma.

Cangoxuma ist d'eerste stadt, alwaar *de Portugeesen* een vaste voet zetten : by gelegentheit een Japander jongeling, *Anger* genaamt, bevreest voor de bitterheit van zyn vervolgers, zich bergde binnen een Japansch klooster : en uit het klooster na *Malacca* ontsnapte, over gestapt in 't koopvaardy-schip, over welk *de Portugees Georgius Alvaresius* het opperste gezagh voerde, op 't jaar vyftien honderdt zeven en veertig. Aan deeze *Anger* kreeg de Jesuit *Franciscus Xaverius* kennis : weshalven eer lang na *Cangoxuma* af steekt ; en, door Angers vrienden wel onthaalt, gelegentheid had, om 't Roomsche Christendom allenthalven te verspreiden. Zedert vestigden *de Portugeesen* tot *Cangoxuma* den zetel des koophandels, waar toe de stad boven gemein gelegen leit in 't Koningryk *Saxuma*. De voornoemde vuurbaak, zynde boven vierkantig met een gedraaide knop, ruft op een zeer dikke ceder-styl, geschoort van twee lange balken, in verbandt aan de ceder-styl door zwaare ankers gehecht. Nevens staat een hooge ladder, welkers sporten wederzyds by de twee stylen uitsteeken.

Beneden is een wacht-huis, en ter andere kant der vuur-baak eenigh getimmer, aan't hangen des bergs. Hier en daar kyken de toppen van de huizen boven de rotze uit. De vuur-baak word zeven myl verre in zee gezien : ter oorzaak het steenachtig gebergte, op welk getimmer staat, buiten gemein hoogh in de wolken komt af te steeken. Aan de voet van 't gebergte leit ter zyden af een visschers gehucht, voor welk een goede anker-grond, dicht onder strand, te vinden is. De Hollandtsche gesant voer in een prachtige jonk stadwaarts tegen een snel-vlietende stroom, die by-na midden weegs door *Cangoxuma* uit een hooge berg na *de Coreer Oceaen* spoelt. De snelle loop *der Rhone* in *Vrankryk*, of *des Donauws* in *Hongaryen*, schynt traagh te vloeijen, in vergelyking by de rivier, welke door *Cangoxuma* stroomt. De jong had twee masten, en een tent op zes stylen. De randen des verdeks bestonden uit kostelyk verguld beeld-week. Voor aan de steven hingen twee ankers : een scherpe plecht, snuits-gewys, stak over de steven. Tusschen kleine en hooge klippen, welcker zommige, niet zonder eenige schrik der beschouwers, boven't hoofd uit keeken, leid het vaar-water na binnen toe. Binnen de klippen vertoond

zich een kostelyk ein konstig water-slot, welk getimmert wierd door *Ongoschio*, der groot-vader des Japanschen Kaisars *Chongon*, toen hy enkelyk toeleide om *Fideri*, zoon van *Taicosama*, de kroon en scepter uit de hand te wringen. Aan *Cangoxuma* lag hem zeer veel gelegen ; want deeze stadt niet alleen de sleutel des Ryks *Saxuma* ; maar zelf van geheel *Bungo* is. Het water-slot, uit de zee met zwaare steenen opgetrokken, heeft een vierkantige gedaante, niet zonder diepe insnydingen, na de manier der Europische bol-werken. Alhier leit een sterke Kaisarlyke bezetting, aan welke de scheepen eerst maal moeten vertollen. Voorts verdient geen gemeine verwondering de steene dyk, die uit de zee langs de haven opgemetselt staat, welker bovenste staketsels met dik koper beslagen zyn. Deeze muur loopt van 't water-slot na twee grotte wacht-plaatzen, welker buiten-muur op de gezeide muur steunt. De twee wacht-huizen hebben een vermakelyk uitzicht op de haven. Ieder is voorzien van vyf hondert's Kaisars lyf-wachten: die geduurig oog in 't zeil houden, nevens de bezettingen binnen 'water-slot: ten einde *Cangoxuma* en't gantsche Ryk *Saxuma* bedwingen: alzoo de Koning over *Saxuma*, ettelyke reizen achter een, zoo veel moed schepte, dat het harnas aangespte tegen den Kaiser, en de gewoonelyke schatting weigerde op te brengen; doch bevogt nooit zegen. Echter, hoewel t'ellekens het onderspit delfde, hervatte hy nu en dan den vervallen moed en ongelukkige wapenen. Voor de wacht-huizen leit een veilige reede tusschen 't hoogh gebergte, waar op de voornoemde vuur-baak staat, en 't noorder gedeelte der stadt. Alhier komen de jonken en allerley vaar-tuig in groote menigte ten anker, of maken haar aan de wal vast. Dicht by leggen de stadts pak-huizen, steunende op een zwaare muur, uit het water gemetselt. Midden weeghs is een groote vierkantige poort, welkers trappen, uit graauwe arduin-steen gehouwen, in de haven benedenwaards loopen: zulks alle pakken en koop-waaren voor *Cangoxuma* langs de zelve in en uit gevoert worden. 't Pak-huis aan de noord-zyde der poort bestaat uit vier groote zalen; maar 't geen ter andere kant zich op doet, heeft een dubbeld dak, en veertien ruime kamers, behalven de solders. Tusschen het noordelyk pak-huis en de wacht-huizen valt de rivier midden door de stadt in de haven. De rivier pronkt aan de zuidelykste oever met zeer prachtige tolhuizen, waar aan de konst zich als uitsloofde, en de onkosten buiten gemein hoog liepen. Alhier moeten de scheepen voor de tweede reis vertollen. Dit brengt groot geldt 's jaarlyks op voor den Kaiser.

Japansche tempel, waar in de lyken geplaatst worden.

Doch schuin over deeze tol-huizen steekt een kostelyke tempel een verheven top hemelwaardt. Binnen dit gebouw worden de doode lichamen eenige dagen geplaatst, eer de zelve na de Japansche wyze verbrandt worden. *De Bonsii* verdienen hier veel geldt, byzonder by de ryken, met doode lichamen te zuiveren: ten einde te aangenamer voor *Amida*, *Canon*, of eenige andere afgodt, wien meest in haar leven dienden, mogen verschynen. Dusdanige gewoonte van de doode lichamen eenige tydt onbegraven te houden, te reinigen en dan te verbranden, heeft lange standt gegrepen over de wereldt. Zelf de oude *Romainen* en *Grieken* bereeds voor 's Heilands geboorte, hielden zulk een wyze omtrent haar afgesturvene. De Grieksche treur-spelschryver *Euripides* voert den Koning *Creon* aldus in:

Ik zelf vertrek terstond, op dat Jocasta 't lyk

Haars zoons afspoelen mag van sweet en stank en slyk.

Ik versta, dat de Dardanenser Illyriërs (zeit Ælianus) zich drie maal wasschen: als gebooren worden, trouwen, en ten laatsten wanneer gestorven zyn. Ook onderhielden de Joden dit wasschen der lyken. Lucas getuigt van Tabitha: Het geschiede in die dagen, dat zy krank wieerd en sterf: en als zy-ze gewasschen hadden, leiden zy haar in d'opper-zale. Het zalven der lyken is niet min oud. Tacitus, Herodotus, Diodorus Siculus, Pomponius Mela, Cicero, Sextus Philosophus, Lucianus, en andere vereeuwde Grieksche en Latynsche schryvers, schryven d'Egyptenaars het balsemen der doode lichamen als eerste vinders toe. Met dit gevoelen stemt Godts woordt over een; want Moses verhaalt van de Patriarchen Jakob en Joseph, datze door d'Egyptenaars gebalsemt wierden. Joseph gebod zyne knechten, den medecyn-meesters, dat ze zyn vader balsemen zouden: en de medecyn-meesters balsemden Israël: en veertigh dagen werden aan hem vervult; want alzoo werden vervult de dagen der geene die gebalsemt worden: en d'Egyptenaars beweenden hem zeventig dagen. En Joseph sterf, honderd en tien jaren oudt zynde: en zy balsemden hem, en men leide hem in een kiste in Egypten. Sextus Philosophus getuigt ook, dat d'Egyptenaars het ingewand uit de versturvene lichamen rukten: voorts de lichamen met balsem vulden tegen de stank en verrotting: in haar huizen bewaarden, en over maaltydt in bragten. De Latynsche dichter Silius Italicus zingt daar van aldus:

Egyptenlandt besluit de dooden,

Recht staande over end, in steen,

Vol reukwerk: en brengt voor genooden

Ter gastmaal in 't gebalsemd been.

Ja zy gaven menig maal de doode lichamen van haar ouders of bloed-vrienden te pande aan de schuldeheeren: welcke, indien by haar leven, mits betalende, niet losten, moghten, volgens *Lucianus*, niet begraven worden. Voorts gebruikten doorgaans tot de genoemde balseming zout, ceder-olie, honing, wasch, myrrhe, kalk, leem, jodenlym en niter. Het wasschen der lyken beschikten de Romainche en Grieksche vrouwen. *Plato* voert *Socrates* aldus in, zeggende: *Het is geraadzaamst, eer ik 't vergif drinke, dat ik my wassche: ten einde geen werk voor de vrouwen over laat, om my dood zynde te wasschen.*

De Japanders schynen ook van *de Romainen* ontleent te hebben, dat de beschikking tot de begravenis der overledenen in de tempels verricht word; want alles, 't geen tot uitvaart diende was in de kerk van *Libitina*, goddinne, des doods, voor geld te bekomen. En gelyk, volgens instelling des Roomsche Konings *Numa Pompilius*, ieder gehouden was zekere penning te werpen in de schat-kist van *Juno Lucina*, als een kind ter wereldt quam; alzoo ook wanneer iemandt stierf, in de spaar-pot toe-gewyd aan *Venus Libitina*. Doch het zalven der lyken wierd door mannen beschikt.

Voorts staan, schuin van de voornoemde tempel af, stadtwart in, zeer prachtige brandt-vrye pak-huizen, alwaar de schattingen van 't gantsche Ryk *Saxuma* bewaard leggen; die een maal 's jaars na *Osacca* gehaalt worden door Kaisarlyke gevolmagtigden. Tusschen deeze gebouwen en 't water-slot staat een schoone kerk: tot welken de landtluiden dagelyks met groote zwermen toevloeijen : ten einde zegen verkrygen voor aerd- en boom- gewasch van haar vrucht- en bosch-goden, die zy by-na op de wyze *der Romainen* en *Grieken* godts-dienst bewyzen. Deeze plachten eertydts den afgodt *Pan*, met een geiten aangezicht en bokke-voeten, gesteld over de herders en jagers, te eeren: als ook *de Fauni*, met hoorens en paerde-voeten, aan wien een geit offerden, gelyk aan den bosch-godt *Sylvanus* melk. Ook zyn zeer beruchte afgoden, *Bacchus* de wyn-stokken bezorgende, d'ongeschickte *Priapus* de hoven, *Ceres* het koorn, *d'Oreades* de bergen.

Vordere beschryving van Cangoxuma.

Doch aan de zuid-zyde der rivier, die door *Cangoxuma* loopt, breid de stadt zich wyd en zyd tegen een hoogh gebergte op: verschuilt eeniger maten achter de verhevene kruin, waar op de vuur-baak staat: en vertoond haar wederom by 't hangen van de rotze. Midden weegs in de zuidelyke stadt staat een schoone kerk, wiens dak boven alle de gebouwen verre uit kykt: is binnen boven gemein kostelyk. De Koning van *Saxuma* was aldaar in geweeken: en liet zich tot *een Bonsius* in-hulden; om zyn leven te behouden, welk verbeurd had, ter oorzaak schatting weigerde, en de wapenen tegen den Kaisar aannam. Voorts leit in het oostelykste deel van *Cangoxuma*, dicht onder de kruin des gebergte, de gerechts-plaats binnen een vaste steene muur beslooten. Terwyl de Hollandtsche gesant alhier zich eenige dagen onthield, allenthalve zeer beleefd onthaalt, wierden elf Japanische en drie Portugeesche Roomsche priesters aan kruisen gespykert, en by langzaam vuur verbrandt. Vier uren boven *Cangoxuma*, in 't noord-westen, vertoond haar een berg, wiens toppen verre door de wolken heen steeken: wordt gehouden voor een der hoogste bergen op den gantschen aerdtbodem, indien men alleenlyk uitzonderdt de bergh *Tereyra* op 't eilandt *Teneriffa*; want het is een gemein gevoelen, dat deeze aldernaast den hemel bereikt, en boven de wolken vuur-vlammen, puim-steenen en sulfer in de lucht uit werpt.

英語版

Description of the mighty City *Congoxuma*,

But the *Holland* Ambassador prosecuting his Voyage to *Jedo*, was overtaken by a stiff Gale out of the North-East in the *Corean* Ocean, that running right before it with her Fore-Sail, he soon arriv'd in the Haven of *Congoxuma*, and dropt Anchor before the *Beacon-Hill*, which was first, with the Approbation of the *Japanners*, built by the *Portuguese*, at the time when they drove a free Trade there.

Congoxuma is the first City, where the *Portuguese* Landed, and got footing in *Japan*, by the means of a *Japan* Youth, call'd *Angier*, who fearing the cruelty of his Persecutors, secur'd himself in a *Japan* Cloyster, where he made his escape to *Malacca*, whither he Sail'd in a Merchant=Man, Commanded by the *Portugal* *George Alvares*, Anno 1547. The Jesuit *Francis Xaverius* coming acquainted with him there, he not long after went with him to *Congoxuma*, where being kindly Entertain'd by *Angier's* Friends, he had an opportunity to Plant the *Roman Religion*.

After this, the *Portuguese* made this City *Congoxuma* their Staple, for which it lay very convenient in the Kingdom of *Saxuma*; the foresaid Beacon square on the top, with a Turn'd Ball, stands on a thick Cedar Pole, supported with two great pieces of Timber, which on the top are fasten'd to the Pole with great Iron Hooks; a high Ladder, of which the Rounds jet out beyond the sides, stands against, and leads up to it; below is a Watch=house, and on the other side several Houses built on the hanging of the Mountain; onely in some places the tops of the Houses appear above the Hills. This Beacon, Sea-men can discover about seven Leagues off at Sea, because the Rock on which it stands is of an excessive height; at the Foot thereof, a little towards one side is a Fishers Village, and before that, good Ground to Anchor in, close under the Shore.

Reception of the *Holland* Ambassador.

The *Holland* Ambassador Sail'd in a stately Jonk towards the City against a swift flowing River, which comes along thorow the middle of *Cangoxuma*, from a Harboring Mountain, and runs into the *Corean* Ocean. The speedy Current of the *Rhone* in *France*, or the *Donaw* in *Hungary*, flow but slowly in comparison of this, which passeth thorow *Coxenga*. The Jonk in which the Ambassador was, hat two Masts, between which stood a Tent, or rather a Cabbin on six Pillars, the edges adorn'd with Gilded Imagery; before on her Bow, hung two Anchors. Thus he Sail'd in , between steep and high Rocks, of which, some terrifi'd the Beholders as they were passing by them.

Within the Harbor appears a strong and Artificial Water-Castle, build by *Ongoschio*, the Emperor *Chongon's* Grand=Father, when he design'd to take the Crown from *Fideri Taicosama's* Son ; because *Congoxuma* was a place of great concern to him ; for this City is not onely the Key of the Province *Saxuma*, but of all *Bungo*. This Water-Castle rais'd out of the Sea with Free-Stones, is square, with many Redouts, like the European Bulwarks. Here is kept a strong Garrison, where the Ships pay Custom.

Moreover, the Stone-Causey made up out of the Sea, and along the Rails on both sides Plated with Copper, deserves no small admiration. This Causey leads from the Water-Castle, to two great Watch=houses, the Out=walls of which rest on the said Causey, and have an excellent Prospect of all the Haven, each of them Garrison'd with five hundred of the Emperors Souldiers, which have a continual eye with those in the Water-Castle on all Transactions, because the King of *Saxuma* hath oftentimes boldly taken up Arms against the Emperor, refusing to pay him the usual Tribute, but still been brought to reason ; yet notwithstanding his bad Fortune, he would now and then take fresh Courage, and receive more Losses : between the Watch=houses and the Mountain, on the North-side of the City is a convenient Harbor, in which the Jonks and other Vessels in great numbers come to an Anchor, or are moor'd to the Shore : Close by are the City Store=Houses, built on a Stone-Wall, rais'd out of the Water, in the middle whereof is a large square Gate, with the Stairs of Free=Stone, that descend into the Haven, at which all the Goods and Merchandizes that are brought to *Coxenga*, are Landed and carry'd into the City. The Store=houses on the North=side of the Gate, consists of four spacious Halls ; but that which is on the other side hath a double Roof, and fourteen large Rooms, besides Garrets. Between the North Store=house, and the Watch-houses, the River flows out of the City in to the Haven, and is adorn'd on one side with brave large Custom=houses, in which, Art shews its Master=piece, no Charge having been spar'd in the building of them ; here the Ships must pay a second Custom, which brings in a great Revenue yearly to the Emperor.

Japan Temple, in which they wash their dead.

But opposite to these Toll-houses, appears a stately Temple, in which the Bodies of Dead Persons are plac'd, for some days before they are burnt, after the *Japan* manner. The *Bonzies* belonging thereto, get vast Sums of Money, especially from the rich People, for cleansing of the dead Bodies, that they may appear the more acceptable to their Gods, *Amida*, *Canon*, or any other whom they chiefly serv'd in their Life time. This kind of Custom of keeping the Dead Bodies Unbury'd for some time, to cleanse and then to burn them, hath been in use a long time in the World; for the Ancient *Romans* and *Greeks* observ'd such a Custom with their Dead, before the Birth of our Saviour. The *Greek* Tragedy written by *Euripides* brings in King *Creon*, saying :

*I will withdraw, that so Jocasta may
From her Sons body, cleanse the filth away.*

I understand that the *Dardanian Illyrians* (saith *Ælian*) are wash'd three times, once when born, a second time when Marry'd, and lastly, when they are dead. The *Jews* also observ'd this Washing of Dead Bodies, St. *Luke* saith of *Tabytha*, *And it came to pass in those days, that she was sick and dy'd ; whom when*

they had wash'd, they laid in an upper Chamber. The Embalming of Dead Bodies is full as Ancient. Tacitus, Herodotus, Diodorus Siculus, Pomponius Mela, Cicero, Sextus Philosophus, Lucian, and other Ancient Greek and Latin Writers ascribe the first Embalming of the Dead to the Egyptians; with which Opinion the Gospel agrees; for Moses relates, that the Patriarchs Jacob and Joseph were Embalm'd by the Egyptians; And Joseph commanded his Servants the Physitians to Embalm his Father: and the Physitians Embalmed Israel. And forty days were fulfilled for him (for so are fulfilled the days of those that are Embalmed) and the Egyptians mourned for him threescore and ten days. And Joseph died being a hundred and ten years old, and they Embalmed him, and he was put in a Coffin.

Sextus Philosophus tells us, That the *Egyptians* took out the Bowels of the deceas'd Bodies, and fill'd them with Balsom, and other Perfumes, to preserve them from stinking and rotting, and kept them in their Houses, setting them at the Table with them: Of which the *Latin Poet Sylvius Italicus* saith thus:

*Egypt Embalms her Dead with rich Perfumes,
And then at Feasts gives them the chiefest Rooms.*

Nay, they oftentimes gave the dead Bodies of their Parents or near Relations as a Security to their Creditors, which if they did not release whilst they liv'd, might not (saith *Lucian*) be buried.

Moreover they us'd for their Embalming Salt, Cedar=Oyl, Honey, Wax, Myrrhe, Chalk, Lime, Asphalt, and Nitre.

The Washing of Bodies was perform'd by the *Roman* and *Greek* Women. *Plato* brings in *Socrates* saying, *It is convenient before I drink the Poyson that I wash my self, that I may not leave any thing to do for the Women, to wash me after I am dead.*

The *Japanners* seem also to have learnt from the *Romans*, That the preparations for the Burial are to be perform'd in the Temples, for all things necessary for Funerals were to be had for Money in the Temple of *Libitina*, Goddess of the Dead. And according to the establishment of the *Roman* King *Numa Pompilius*, every one was bound to throw certain Sums of Money into the Treasury of *Juno Lucina*, when every they had a Child born, and also when any one dy'd, into a Pot, Consecrated to *Venus Libitina*: But the Embalming of Dead Bodies was perform'd by Men.

Moreover, not far from this Temple, towards the City, are several Stone Store-houses against Fire, in which the Treasures of all the Province of *Saxuma* are kept, and are once a year, by the Emperors Forces fetch'd to *Osacca*; between these Buildings and the Water-Castle stands a fair Temple, to which the Country People come daily in great numbers, there to Pray for a Blessing on their Plants, Trees, and Cattel, to which they shew Reverence, almost like the *Romans* and *Greeks*, who in former times us'd to honor their Idol *Pan* with a Goats Face and Bucks Feet, as a Deity place'd over all Herdsmen and Hunters; and also to the *Fauni*, they attributed Horns, and Horses Feet, to whom they sacrific'd a Goat;

as likewise Milk to *Sylvanus*, God of the Forests ; And in like manner, to *Bacchus*, the God of Wine ; the Deform'd *Priapus* of the Gardens ; *Ceres*, the Corn Deity, and *Oreades*, of the Mountains.

Further description of *Congoxuma*.

But on the South side of the River, which flows thorow *Congoxuma*, the City spreads it self, running up against a high Mountain, and is hid, for the most part, behind the Rock, on which the Beacon stands. Then again, on the hanging of a Hill, about the middle, in the South part of the City, stands a large Temple, whose Roof appears above all the Houses, exceeding costly within. The King of *Saxuma* going thither, was made, and receiv'd into the Orders of the *Bonzi*, so to save his Life, which he had forfeited, because he refus'd to pay Presents, and rebell'd against the Emperor. Moreover, in the East part of *Congoxuma*, near the foot of the Mountain, is the place of Execution, Inclos'd within a Stone Wall.

Whilst the *Holland* Ambassador staid to refresh himself here, being every where kindly entertain'd, he saw eleven *Japanners* and three *Portuguese*, being *Christians*, Nail'd on Crosses, and Roasted by a gentle Fire.

Four Leagues from *Coxenga*, towards the North=West, appears a Mountain, whose top reaches above the Clouds, and is taken for the highest in the World, except the Mountain *Tereyra*, on the Island *Tenariff*, for it is a general Opinion, that that is nearest to the Heavens, and Vomits forth Fire and Brimstone above the Clouds.

独語版

Nach gehaltenem Kauftage machte sich der Gesante auf die Reise nach Jedo : da ihn dan, in der Koreischen See, ein solcher sturm ans dem Nordosten überfiel, daß er im Hafen vor Kongoxuma auf den Feuerturn anlauffen muste. Diesem Feuerturn haben ehemals die Portugallier, als sie alda freyen Kaufhandel trieben, mit der Japaner bewilligung, gestiftet.

Die Stadt Kangoxuma.

Kangoxuma ist die erste Stadt in Japan, da die Portugallier, auf folgende weise, einen festen Fuß bekamen. Ein Japaner Jüngling Anger, flohe vor seinen Verfolgern in ein Japanisches Kloster, und aus dem Kloster nach Malacke, auf eben demselben Schiffe, dessen Befehlhaber der Portugallier Georg Alvares war. Dieses begab sich im 1547 Jahre. Mit gemeltem Anger geriet der Jesuiet Frantz Xaverius, wie wir oben weitleufig gemeldet, in Kundschaft: darumb er auch mit ihm nachmahls auf Kangoxuma segelte; und durch Angers Freunde gelegenheit bekam, den Röhmischen Glauben in Japan allenthalben aus zu breiten. Hierauf befestigten die Portugallier zu Kangoxuma den Sitz ihres Kaufhandels : darzu die Stadt im Königreiche Saxuma über alle masse wohl gelegen. Der vorgemelte Feuerturn, der oben viereckicht mit einem gedrehetem Knopfe, ruhet auf einer sehr dicken Zedernen Seule, welche mit starcken eisernen Klammern an zwee lange Balcken fest gemacht ist. Nach oben zu steigt man durch eine hohe und starcke Letter. Unten stehet ein Wachhaus, und auf der andern seite des Feuerturnes

einige Gebeue, am hange des Berges : derer Gübfel über die Steinrotzen hier und da hingehen. Am fusse des Berges liegen etliche Fischersheuser, vor welchen, dicht am Strande, ein guhter Anckergrund sich befindet.

Alhier fuhr der Holländische Gesante in einem köstlichen Japanischen Schiffe nach der Stadt zu, gegen einen schnellen Strohm auf; welcher fast mitten durch Kangoxuma, aus einem hohen Berge, geflossen kommet. Die Rohne in Franckreich, und die Donau in Ungern, müssen diesem Flusse an snelheit den vorzug lassen. Gemeltes Schif hatte sechs Mäste, und ein köstliches Gezelt auf sechs stützen. Die Ränder des Taches waren mit künstlich vergüldeten Bildwercken gezieret. Zwischen hohen Klippen, welche man nicht ohne schröcken ansahe, lief das Schif hin. In diesen Klippen liegt ein schönes Wasserschlos : welches Ongoschio, des Japaners Chongon Großvater, bauen lassen; als er ihm gänzlich vorgenommen, dem Fideri, des Taikosama Sohne, die Japanische Krohne aus der Hand zu reißen. An Kangoxuma war ihm sehr viel gelegen : dan diese Stadt ist nicht allein der Schlüssel des Königreichs Saxuma, sondern auch selbst zu Bungo. Gemeltes Wasserschlos, welches man aus der See, mit starcken Steinen, in die höhe geführt, hat eine viereckichte Gestalt, mit tieffen einschneidungen. nach der weise der Europischen Bolwercke. Hierauf liegt eine starcke Keiserliche Besatzung : da die Schiffe ihren ersten Zol geben. Auch ist der steinerne Tam, welchen man aus der See längst dem Hafen hin gebauet, und mit Kupfer starck überzogenen Stakenwerken verwahret, nicht ohne verwunderung an zu schauen. Dieser steinerne Tam leuft nach zwey großen Wachtheusern zu ; derer Aussenmaur auf gemeltem Tamme ruhet. Die zwey Wachheuser haben eine lustige aussicht auf den Hafen. Ein iedes ist mit fünf hundert Keiserlichen Leibwächtern versehen : welche, neben der Besatzung im Schlosse, genaue achtung auf alles geben, damit sie die Stadt Kangoxuma, und das gantze Königreich Saxuma im zaume hielten : dan der Saxumische König hat unterschiedliche mahl nach eine ander so viel muhtes gehabt, daß er den Harnisch wider den Japaner angezogen, und die gewöhnliche Schatzung zu geben geweigert ; aber er hat niemahls den Sieg erhalten. Nichts des zu weniger, ob er schon allezeit die Niederlage hatte, begunte er dannoch wieder Muht zu fassen, und die unglücklichen Waffen in die Hand zu nehmen. Vor gemelten Wachheusern befindet sich eine sichere Schifslage zwischen dem hohen Gebürge : darauf der oberwähnte Feuerturn, und das mitternächtliche Teil der Stadt stehet. Alhier lieget fort und fort eine grosse menge Schiffe und Schuhten entweder vor Ancker, oder am Walle fest. Nahe darbey befinden sich der Stadt Packheuser, auf einer starcken Mauer, aus dem Wasser in die höhe geführt. In der mitte stehet ein großes viereckichtes Tohr, dessen Treppe von grauen Steinen nach unten zu in den Hafen lauffet ; also, daß auf derselben alle Kaufwahren der stadt Kangoxuma ein- und aus-gebracht werden. Das Packhaus an der mittelnächtlichen seite des Tohres hat vier große Sähler : und dasselbe auf der andern seite ein zweyfaches Tach, und vierzehn grosse Gemächer, ausser den Söllern. Zwischen dem mitternächtlichen Packhause und den Wachheusern leuft der Flus aus der Stadt in den Hafen, und ferner fort in die Koreische See. An diesem Flusse liegen, an der Mittagsseite, sehr

herzliche Zolheuser : welche so wohl an Kunst, als Kosten, viel andere Gebeue übertreffen. Alhier müssen die Schiffe zum andern mahle zollen : welches vor den Japaner alle Jahr eine große anzahl Geldes aufbringet.

Gegen den Zolheusern seitwärts über lieget ein schönes Götzenhaus, dessen Gübel sich hoch hinauf in die Luft erheben. Hierinnen stehen die Leichen etliche Tage nach ein ander, ehe sie nach der Japaner weise, verbrant werden. Dieses trägt den Bonsiern oder Japanischen Pfaffen ein großes Geld ein, sonderlich bey den Reichen, wan sie ihre verstorbene Leiber reinigen ; damit sie umb so viel angenehmer vor dem Amida, Kanon, oder einem andern Abgotte, dem sie in ihrem Leben am meisten gedienet, erscheinen möchten.

Diese gewohnheit die Todten Leiber eine zeit lang unbegraben zu laßen, zu reinigen, und endlich zu verbrennen, ist in der Welt schon vor uhralten Zeiten im schwange gegangen. Selbst die alten Röhrer und Griechen hatten eine solche weise vor unsers Heylandes Gebuhrt. Der Griechische Schauspielschreiber Euripides führet den König Kreon also ein :

Zur stunde geh ich weg, auf das Jokasta wasche

Den Leichnam ihres Sohns im Bad' aus scharfer Asche.

Ich verstehe, daß die Juirier, sagt Elian, dreimahl gebadet werden : als sie zur Welt gebohren seynd, als sie Hochzeit machen, und zum letzten wan sie gestorben. Auch war dis waschen der Leichen bey den Juden gebreuchlich. Lukas bezeuget von Tabita: Es geschahe in denselben Tagen, daß sie Krank ward, und starb: und als sie ihren Leichnam gewaschen, legten sie denselben in den Obersaal. Eben so alt ist auch das Salben der Leichen. Tazitus, Herodotus, Diodoor von Sizilien, Pomponius Mela, Tullius, Sextus der Weltweise, Luzian und andere alte Griechische und Lateinische Schreiber eignen die erfindung des Leichensalbens den Egiptern zu. Eben dasselbe bezeuget auch die heilige Schrift : dan Moses erzehlet, daß die Erzwäter Jakob, und Josef durch die Egipter gesalbet worden. Josef geboht seinen Knechten, den Aerzten, daß sie seinen Vater salben solten : und die Aertzte salbeten Israel. Vierzig Tage waren damit zugebracht : dan so viel Tage brachte man mit denen zu, die man zu salben pflegte. Und die Egipter beweinten ihn siebenzig Tage. Und Josef starb, als er hundert und zehen Jahr alt war : und sie salbeten ihn ; und man legte ihn in einen Sarg in Egipten. Sextus der Weisemeister bezeuget, daß die Egipter das eingeweide aus den verstorbenen Leibern genommen : und dieselben wieder mit Balsam, gegen stanck und feulnüs, gefüllet ; in ihren Heusern bewahret, und mit zur Mahlzeit gebracht. Eben dasselbe meldet auch Silius Italikus.

Ja, sie gaben die todten Leiber ihrer Eltern oder Bluhtsfreunde den Schuldherren vielmahls zum Pfande : welche, wan sie bey ihrem Leben nicht ein gelöset worden, durften, wie Luzian bezeuget, nicht begraben werden. Zu solchem Salben der Todten Leiber gebrauchten sie Salz, Zedern-öhl, Honig, Wachs, Mirren, Kalck, Leim, Jüdenleim und Niter. Das Waschen der Leichen verrichteten bey den Röhmern und Griechen die Frauen. Plato führet den Sokrates also ein : Es ist am rahtsamsten, eh ich das Gift

eintrinke, daß ich mich wasche : damit ich den Frauen diese mühe, mich zu waschen, wan ich todt bin, benehme.

Die Japaner, wie es scheint, haben es von den Römern auch entlehnet, daß sie die zubereitung zu den Begräbnissen in den Götzenheusern verrichten. Dan bey den Römern war, in dem Götzenhause der Abgöttin des Todes Libitine, alles, was man zu den Leichenbegängnissen nöhtig hatte, zu kauffe. Und wie ein ieder, nach der Einsetzung des Römischen Königes Numa Pompilius, verpflichtet war ein gewisses Geld in den Schatzkasten der Juno Luzina zu werfen, wan ein Kind zur Welt getragen ward : also muste es auch in den Spahrtopf der Venus Libitina geworfen werden, wan jemand starb. Aber das salben der Leichen verrichteten die Männer.

Gegen dem gemeldten Götzenhause zu Kangoxuma seitwärts über, was mehr in die Stadt hinein, stehen etliche herzliche brandfreye Packheuser ; da die Schatzungen des gantzen Saxumischen Königreichs bewahret, und einmahl im Jahre, durch des Japaners Gevolmächtigte, nach Osacka gehohlet werden. Zwischen diesen Gebeuen und dem Wasserschlosse stehet ein schönes Götzenhaus : zu welchem die Landleute täglich schwarmsweise geflogen kommen ; damit sie von ihren Frucht- und Baum-götzen, welche sie fast auf der alten Röhmer und Griechen weise verehren, einen Seegen zu ihren Erd- und Baum-gewächsen bekommen möchten. Diese, nämlich die Röhmer und Griechen, pflegten ehemals den Abgott Pan, mit einem Bocksangesichte Ziegenfüßen, über die Hürten, und Jäger gestellt, heilig zu ehren : als auch die Faunen, mit Hörnern und Pferdefüßen ; denen sie eine Ziege opferten, gleichwie dem Buschgötzen Silvanus Milch. Bachus der Weingötze, der garstige Priapus der Gartengötze, die Zeres, des Kornes Götzin, und die Oreades die Berggötzen, waren bey eben denselben auch sehr berühmte Abgötter.

An der Mittagsseite des Flusses, welcher durch Kangoxima lauffet, breitet sich die Stadt sehr weit über einen hohen Berg aus ; verbürget sich ein wenig hinter dem erhobenem Ende desselben, darauf der obgemeldete Feuerturn stehet ; und lesset sich bey dem hange des Steinrotzen wieder sehen. Mitten in diesem Sud-ende der Stadt stehet ein schöner Götzenbau, dessen Tach über alle andere Gebeue weit hinsiehet. Inwendig ist er ungemein köstlich. Hierein hatte der König von Saxuma seine Zuflucht genommen, und sich zum Japanischen Pfaffen einweihen laßen ; damit er sein Leben erhalten möchte : welches er anders verlohren, weil er dem Japaner schatzung zu geben weigerte, und das Schwert wider ihn angürtete.

Im Morgenteile mehr gemelter Stadt Kangoxuma lieget, dicht unter der höhe des Berges, der Gerichtsplatz, mit einer starcken Mauer umgeben. Weil sich der Holländische Gesante alhier aufhielt, worden eilf Japanische und drey Portugallische Römische Priester an Creuze genagelt, und bey langsamen Feuer verbrant.

Der höchste Berg in Japan.

Vier stunden von Kangoxuma im Nordwesten erblicket man einen Berg, dessen Güpfel hoch in die

Luft aufsteiget. Dieser wird vor einen der höchsten Berge auf den gantzen Erdboden gehalten ; doch sondert man allein aus den allerhöchsten Berg Tereira auf dem Inlande Teneriffa : dan es wird ins gemein darvor gehalten, daß dieser den Himmel am allernächsten erreicht, und über den Wolcken Feuerflammen, Bümssteine, und Schwefel in die Luft auswirfet.

1. Hooge berg met een vuur-baach.
2. Wooningen der Japanfche viiffchers.
3. Jensch van d' Hollandsche gogant.
4. Water-floet.
5. Steene dyck met koperen ftaeketfels.
6. De Haven.
7. Poort van ftede pack-huizen.
8. Tempel voor deude Iicchamen.
9. Pack-huizen van d' Lande tellen.
10. Tempel der d'fch-goden.
11. Twee groote Wucht-huizen.
12. Tel-huizen.
13. De Rivier.
14. Schoone tempel.
15. Gerechte plaats.
16. Hooge berg vier uren buiten de Stede.

CANGOXUMA

